

—第二十二回全国高校生童話大賞—

受賞作品集

目次

はじめに 第二十三回全国高校生童話大賞実行委員会 委員長 富士大学学長 岡田秀二……………1

☆金賞

小径に眠る 谷 まゆみ (高知県 県立山田高等学校二年)……………4

☆銀賞

命の花 星野明希 (東京都 共立女子高等学校二年)……………18

悠久の手紙 眞弓璃子 (兵庫県 神戸星城高等学校二年)……………30

凍み炭団 (しみたどん) 内部 泰成 (島根県 県立出雲高等学校二年)……………46

☆受賞作品一覧……………60

☆第一回～第二十二回受賞作品 作品一覧……………63

☆選考委員プロフィール……………77

はじめに

第二十二回全国高校生童話大賞実行委員会 委員長

富士大学学長

岡 田 秀 二

今回も童話の持つ「魅力」、文学の持つ「力」を改めて知ることが出来、本事業の意義を関係者一同再確認することが出来ました。多くの人にぜひとも味わっていただきたいと思えます。災害や戦争や人間が壊れているとしか表現できないようなこの時代においてこそ示す、高校生の持つ瑞々しい感性とこれからの社会づくりへのヒントを。

関連して私は、文字言語の不思議を改めて実感しました。言語を用いることで事実や情報が個人を超え外部化されます。つまりその限りで客観化され認識として固定化します。文字言語のこの側面は人類に計り知れない進歩となりました。しかし文字言語は同時に、その「意味」という点からは多くの人に様々な内容と射程で捉えられることとなり、同じく個人を超え時空を超えて不安定化します。明証的ではなくなるのです。「童話」や「文学」や「ファンタジー」とは文字言語のこの側面に立つ

ものです。「文学作品」が一人歩きする、作品が作者の意図には止まらないとはこの点を言っているのです。

作者が作品を生み出すその動機や過程においても、文字言語は大きな役割を果たしているとしたかと思えませんが。言語とは人を人間化する、つまり思惟する事、思想する人間と一体のものなのではないでしょうか。デジタル化時代、情報化社会、映像化とスタンピング等々と言われる今日社会であればこそ、紙媒体に示される文字言語の、これまで果たしてきた役割と今後の人間生活に果たす可能性についても改めて整理してみる必要があると思えました。

それにしましても「賢治のまちから」全国高校生童話大賞」がこのように充実した内容と規模で行われているのは富士大学、花巻市、花巻市教育委員会三者共催の賜物であります。それぞれの機関に御礼申し上げますと共に、外部の選考委員の方々、内部の選考委員の方々と事務を支えていただきました方々に心より御礼を申し上げます。そして何より御礼を申し上げますなければならないのは、この賞の応募にご指導いただいた高校の指導者の皆様と応募いただいた高校生の皆さんです。実行委員会を代表いたしまして心より感謝を申し上げます。

金

賞

『小徑に眠る』

こみち

小径に眠る

高知県 山田高等学校二年 谷 まゆみ

太陽が顔を隠して、紺青が紫の空を覆ってゆきます。どこからか、シリシリシリ……と虫の声が聞こえてきました。新月の夜に森がしずんでしまえば、小さな星がちらちらと光るだけでは、道はおろか、一寸先も見渡すことはできません。そんな時です。こちらを手招きしているヤツデを透かしたその向こう。橙色の光が煌々と輝いておりました。アメ色になるまで磨かれた木の支柱に、お皿をひっくり返したような笠、それに何と書いても、あたりを照らし出す丸い電球。それは街灯でした。周りにはたくさんのお虫たちが飛びまわり、翅をこすりあわせておしゃべりを楽しんでます。街灯はその様子をじっと眺めていました。

「いやあ。夜なのに雇みたいだ」

一匹のカメムシが眩しげに街灯を見上げます。その目がやけにキラキラとしていて、街灯は思わず、ふいっと森に視線を移して、黒くぬりつぶされた木々を恨めしげに見つめました。

「でも周りは真っ暗じゃないか」

自分が照らしているところなら、道に転がる小石を数えることができるほど明るいでしょう。けれども虫たちが少し飛ばば、すぐに光なんて届かなくなってしまうことは街灯にだって分かりました。

「私らはお天道様が隠れておしまいになつたら、なんにも見えやしねえんだ」

不意に、柱にとまっていたコフキコガネが話しはじめます。彼は言い聞かせるようにゆっくりと言葉を紡ぎ、

街灯を優しくなでてくれました。

「お前さんがきてくれたのは、山桜の咲く頃だったか。こうやって皆でおしゃべりができるようになったのはそれからなんだよ」

彼の言葉に他の虫も頷いたり、飛び回ったりします。

「……そう」

街灯には素っ気なく返事をするこじかできませんでした。無性にコフキコガネの言葉がくすぐったく感じたからです。街灯の照れ隠しのようなつれない態度に、彼はにこにここと笑って翅を揺り動かししました。虫たちの会話はだんだんと賑やかになってゆきます。

「待って、兄さん」

突然、声が目の前の小道を吹き抜けました。虫たちが、なんだ、なんだとそちらを振り向きます。そこは人が昼も夜も行き交う道でした。次の瞬間、人の子がその緩やかに下った道を球のように転がり落ちて、光の中に飛び込んできました。短いズボンから見え隠れする膝が赤く擦りむけています。そんなことなど気にもとめず、その少年はぱっと立ち上がりました。そうして、草木をかきわけてやっと通れるような獣道を竹箒を振り回しながら、下ってゆきました。街灯は呆気にとられます。

「なんておそろしいのー」

虫たちの中の誰かが身をふるわせて街灯の影に隠れました。けれども街灯は、その誰かの言葉なんて聞いていませんでした。なぜなら、先ほどの子を追うようにもうひとり、人の子が下ってきたからです。その子は竹で編まれた籠を持ち、スカートの裾をひらひらとさせながら、街灯の下でキョロキョロと誰かを探しています。

「待つてって言ったのに。……川は「うちかな」

ほんの少し前の声はこの子だったようです。彼女は不安そうに獣道を見やって、籠をぎゅつと抱くと飛び込むように入ってゆきました。

「忙しい奴らだよ、人間つてのは。特に子どもときたら……」

ガムシがやれやれとでも言いたげな口調でつぶやきます。

「そうそう。子どもつてのは残酷さ。この前なんか、アサギマダラの娘さんが人の子に印をつけられたとか。それで、羽に模様が増えてしまったんだって」

皆がこわごわと話します。街灯はそれに耳を傾けながら、人の子が消えた獣道を見つめ続けました。

「コフキコガネさん」

街灯がぼつりと呼びかけます。彼はまだそこにいました。

「なんだい？」

「人の子は暗くても大丈夫なんだろうか」

「コフキコガネはあつからからんと言いました。」

「お前さんの心配することじゃねえさ。人は私らより夜目がさく」

待つていれば直ぐに姿を見せるだろうと言つて、彼はどこかに飛んでいきました。コフキコガネの言った通り、人の子たちは幾分もしないうちに草木をがさりとかきわけて来ました。少女の籠にはなにやら淡く光るものがあります。街灯は目を凝らしてそれが何かを見ようとしましたが、少女の手に遮られてしまつてうまく見えません。けれども、周りの虫たちはわっと騒ぎはじめ、散り散りになってゆきました。街灯が驚いて反応もでき

ないでいると、人の子とは違つ足音がひとつ聞こえてきました。

「あらあら。それは強〜」

「母や〜」

優しそうな面立ちの人が子どもたちの頭や服についた泥を払い落とします。そして、街灯の光を眩しそうに見上げました。

「月よりよっぽど明るくて安心ね。子どもたちのお迎え、ご苦労さま」

彼女の手が街灯をするりとなでてゆきました。その温かさがじんわりと胸に広がります。

「ここ、明るくなつたから道に迷わなかつたんだ」

少年がぼそつと口を開きました。それに少女も大きく頷きます。

「それは良かったわ。さあ、帰りましょうか。お父さんが待つてるわよ」

「うん。あのね、螢にね、箒をふわつと持つていったら、とまってくれるの！ とつてもきれいだつたのよ」

少女が手を引かれて、ぴよんぴよんと跳ねながら歩きます。光の外へと一步踏み出すと、彼らはすつと夜にまぎれてしまいました。

街灯は光と闇の境目を見つめました。紺と橙がお互いを押しつたり引いたりしながら混ざりあっています。道に転がった砂利の一つひとつ、葉っぱの一枚一枚までもが自身の光でつやつやと輝いているのを見ると、街灯は心が満たされたような気分になりました。

この日も、次の日も、街灯は夕方になると明かりを灯し、太陽が昇るころに眠りにつく日々を過ごしました。毎日、毎日。何年も、何十年もです。人々の願いで造られた街灯は、夜道を照らし、虫たちの笑いに満ちた噂話

を聞き、酔つ払つたように歌い明かす彼らを見守る日々を続けました。そんな中で何度も耳にしたのが感謝の言葉でした。

——ああ、僕は誰かの役に立っているんだ。きつと皆にとつてかけがえのない物になっているんだ。いつの間にか、街灯の心は喜びや得意でいっぱいになっていたのです。

ある昼下がりのことです。街灯の前の小道を一台の車が走り抜けてゆきました。窓からちらりとのぞいたのは見知った男の姿でした。彼は昔、蛭を取りに獣道を走ったあの子です。時には網を、時には釣り竿を持って小道を駆け回り、帰ってくる頃にはどこかしらに必ず傷を作ってくるような子でした。けれどいつの頃からか、彼はあたりを駆け回らなくなってしまう、最近では姿を見かけることもなくなっていたのです。街灯は彼の外出を珍しいこともあるものだと思いつつ、また眠りにつきました。

それからいくら経っても、彼が帰ってくることはありませんでした。街灯が気がかりに思っている間にも、彼と同じように出て行ったとき戻ってくることはない人々の姿を何度も見ることになりました。

そうやって、いくつもの別れを繰り返すうちに、街灯の前を通る人の数は減ってゆきました。ひとりも通らない夜があることも稀ではありません。街灯の手入れをしてくれるのはシワの刻まれた手ばかりで、今年の初夏など、周りの枝を払ったくらいで街灯の笠に絡みついた蔦さえ取ってはくれませんでした。

けれども、今日も街灯は太陽が沈んでいくと明かりをぼっと灯します。街灯のそばでは今も昔も変わらず、虫たちが毎夜のごとくお祭り騒ぎをしているのですから。

——虫たちは僕を必要としてくれているんだ。人みたいに離れていったりなんかしないに決まってる。

街灯は胸に開いた小さな風穴を埋めるように強く言い聞かせて、虫たちの声に耳を傾けました。

「今日は空に雲ひとつありませんよ」

話しかけてくるのはアゲハモドキです。彼は翅を広げて、空をうっとり眺めました。彼の言葉通り、空には薄い雲さえかかっていません。けれども、街灯には上手く空が見えませんでした。自分の橙色の光が空気に折り重なって層をなしているからです。

「ほら、見てください。お月様がとってもきれいだと思いませんか」

街灯は陶醉したような彼の声になんとか面白くないような心持ちがして、碌に月を見もしないで返事をしました。

「月の話をしてくれたのは君が初めてだ。僕の周りにいたんじゃないだろう」

アゲハモドキは驚いたような素振りを見せました。

「いえ、そんなことないですよ。ここからでもきれいに見えますから」

「そう」

街灯はこれ以上彼と口を利きたくなくて、突き放すような口調を取りました。

しかし、アゲハモドキは街灯の気持ちに気づくどころか、ひたすらに空に浮かぶ月のみを見つめ続け、口を開きました。

「……どうして皆はお月様に行かないんだろう。皆、光が好きなのはなぜなの」

翅を羽ばたかせながら呟くアゲハモドキの言葉に、ぎらっとした気持ちかわきあがってきます。それは、彼の言葉に頷いてやろうという思いとは正反対にある感情でした。それが心につつりと開いてしまったすき間からじ

りじりと滲み出してきます。街灯はその感情が仄暗いものであることを承知していました。そして、それが紛うことなき自分の思いであることも十分に理解していたのです。

「……あんな月のどろろがきれいだったというんだ」

街灯がぼそりと呟いた言葉にアゲハモドキがやっと振り向きました。それでも街灯は構わず続けます。

「月なんて僕よりずっとぼんやりしているし、毎日、光っている場所も大きさも違ってる。挙げ句の果てには気まぐれを起こして姿を見せない時だつてあるじゃないか」

突然、街灯が強い口調で話し始めたので、楽しくおしゃべりしていた虫たちもびっくりしたような表情を見せます。電球の光が一瞬消えて、また点きました。

「君、一度月まで行つてみたら良い。きつとその気まぐれに嫌気が差すだろうさ。……そんなのより、僕のほうがずっと優れてる！ 僕は君たちが生まれるよりうんと前からここにいて、毎日、毎日、一晩だつて休まずに君たちに付きあつてるんだから！」

街灯はアゲハモドキをきつと睨みつけました。彼はたじたじになって翅を広げました。

「ぼ、僕……」

彼は何かを言いかけてから口を引き結ぶと、鱗粉を舞わせて飛んでゆきました。

「まあまあ、街灯さん。あの子の言ったことなんて気にすることありませんよ」

「そつそつ。あいつ、変わり者だからなあ」

虫たちが街灯に寄り添うように言葉をかけてくれます。けれども、街灯はその言葉を上手に受け止めることができませんでした。

——皆に必要とされている、感謝されることをしているのに、そんなことを言うなんて失礼だ。

街灯はアゲハモドキへの怒りが収めきれず、その言葉を彼に投げつけてやりたい衝動にかられました。けれども、その思いが他の虫たちにも伝わってしまうのは嫌でした。さっきアゲハモドキに放った言葉に潜む自分の本当の気持ち、虫たちに悟られてしまうのではないかと恐ろしく感じ、その気まずさから彼らの顔を見ることさえできやしませんでした。

「……ごめん。今日はこれでお開きにしてくれないうか」

街灯にはそう言うのがやっとでした。自分でも驚くほど、その声はふるえていました。彼の願いに虫たちは振り返り、振り返りしながら、飛び立ってゆきます。

「気に病むことはないんだからね」

そう言って、最後の虫が姿を消しました。

虫たちの元気な声がなくなると、途端に闇が街灯をぎゅつぎゅつと押し込めてきて、声が詰まってしまいました。そのまま闇が自分までも覆ってしまふんじゃないかという恐怖と、いっそのこと覆い隠してくれば良いという自棄が胸を焦がしました。

たったひとりで過ごす夜は永遠に続くかのように思われました。そしてやっと朝日が顔を出した頃、街灯はようやく目を閉じました。けれども、昔の思い出や幻ばかりが次々と現れては消えてゆきます。それはとても苦しく浅い眠りでした。

「それって本当のこと？ ふもとの町が輝いてたって？」

街灯は聞き覚えのある声で目を開けました。

「本当だよ。昨日の夜に行ってきたもん」

刹那、街灯は冷水を浴びせられたかのように眠りから醒めました。夜にいつも来てくれるカミキリムシが二匹、こちらに背を向けて杉の梢にいたのでした。

「大通りに沿ってキラキラしててね、目がくらむほどの眩しさなんだ。仲間もたくさんいて、楽しそうなおところだったよ」

はしゃいだ声が空気をふるわせました。街灯はぎゅっと目を瞑りました。

「すごいー！ 行ってみたいなあ。ねえ、他の皆も誘って行ってみるっていつのはどう？」

「ちよっとー！ 大きな声出さないでよ。彼が起きてしまったら……」

彼女の言葉の後にはと息を呑む音が聞こえます。それからわずかな間をおいて、彼女らが飛び立つ音が聞こえました。

——ああ。

何かが壊れる音がします。それは街灯だけに届いて、ひどく惨めな気持ちにさせました。

どれほどの時間が経ったでしょう。空を見上げて、目を閉じて、何をしても、去っていった人やアゲハモドキ、カミキリムシたちが頭にちらついて離れません。けれども時間は彼に構わず流れてゆきます。

——明かりを灯さないで。

目没を目の端に捉え、街灯はいつものようにぼっと光を点け——。

「ああー！ ぎゅっして」

喚きが森に木霊して消えました。光を灯したのにも関わらず、街灯の足元には薄い闇がたゆたっていました。

それは逃げも恐れもせず、悠々と漂っているのです。

「べつしたの？」

アオドウガネが慌てたようにやってきました。

「影が……。僕の光が、弱く」

目を覆いたくなる光景に街灯の言葉は続きません。意味を成さない嘆きだけが溢れてゆきます。

「大丈夫、大丈夫だから。まだ貴方は明るいままだよ」

彼女はなぐさめるように街灯の上を歩きます。

「辛いことは全部はきだしてみなさいな。きつと心が軽くなるわ」

その言葉に街灯は何も答えられませんでした。何度も話そうとしてみるのですが、その度に情けなさに言葉が詰まってしまうのでした。

「私でいいなら、いつでも聞いてあげるから」

彼女は約束と言って微笑みました。

じりじりと焼けるような暑さだった夏が過ぎ、赤や黄の木の葉が舞う秋がきました。日に日に、虫たちは街灯の下へ集まってこなくなりしました。けれど、アオドウガネは暇さえあれば、街灯が眠っている昼間でもそばに来てくれます。街灯はほんの少し苦しみを紛らわせることができました。しかし、まだ街灯は彼女に胸の内を話すことができませんでした。それは虚勢でしたが、変わらず崩しがたいものだったのです。

その日の夜は冷たい風が吹いています。日が沈んでも彼女は姿を見せません。寒くなってゆく度に彼女の元気が失われつつあったことは分かっています。

——きつと、彼女はもう。

暗い予感に慣れてしまつてくらくらいには、一方的な別れを幾度となく経験していました。けれども、胸はずきずきと傷んで、後悔を引き寄せてきます。

ぼちりと音がして前触れもなく光が消え、街灯はひゅつと息を呑みました。疾く、あらん限りの力を込めてぱつと光を灯します。けれども電球は嫌な音を立てながら、風に吹かれた蝋燭のように揺らぐ光を落とすばかりでした。

「冗談じやない」

街灯は嘲るように乾いた笑いをもらします。

「たったひとりで最期を迎えるなんて」

街灯は口に出してから、はつとしました。いつの間にか、ここにいるのは街灯だけになっていたので。もう前までの賑やかな声が響くことはありません。

「……寂しう」

誰かを必要としていたのは虫や人たちではなく自分だったのだと、ようやく気がつきました。去っていったのは彼らの方。けれども、それを引き止めずに心のなかで責めていたのは街灯でした。

——そばにいてほしい。そう言うだけだっただろうに。……でも、もう遅い。

街灯がふつと力を抜くと、橙色がだんだんと色彩を失ってゆきます。紺がそこまで迫ってきていて、街灯は逃げようように上を仰ぎました。そこには紺青に染まった空が途方もなく広がっています。

街灯は初めて自分の光が重ならない夜空を見ました。徐々に霞む視界の中で、金色に輝く月を見ました。その

時、街灯の心に広がったのは羨望せんぼうの気持ちでした。自分がここに立つより前から今まで、そしてこれからも、月は光り輝き続けるのでしょう。雲よりずっと高いところで、人々や虫たち、街灯を見つめ続けるのでしょう。月の、ただ高潔こうけつに在る様に、思わず喉のどが震ふるえました。

「綺麗きれいだ」

言葉とともに橙だいだいが夜に消えます。くすんだ白いガラスからは、もう微かすかな音ねさえしません。

残ったのは街灯だった一本の柱。朽くちた支柱に蔦つたが絡みつき、木々は両手を広げて錆さびびた笠かさを覆い隠します。そこには、ただ、北風きたかぜが木の葉をさらさらと揺らす音が木霊こだまするばかりでした。

選考委員コメント

『小径に眠る』

石野

晶

街灯を主人公にして作品を書くのは難しかったのではないのでしょうか。街灯は動かないので、景色も固定されます。それでも引きこまれる文章や細かな心理描写で、豊かな物語りとなっています。役に立ちたい、必要とされたいと思うのは、人も物も変わらないのだとはっとさせられます。それだけに街灯に幸せな最後を迎えて欲しかったと思いました。

牛崎

敏哉

かつてたくさんのお虫たちに感謝された街灯が、年月を経て一人寂しくその役目を終える。その心情の流れが見事に描かれ、母子の蛍取りや、月の光に閃くエピソードも効果的に盛り込まれている。どこか小川未明の童話のような幻想的味わいがある。ラストに月の光を「綺麗だ」とつぶやいた街灯の姿には、人生とは何たるかという人の一生が重なり切ない。

夏井

敬雄

山里の森近くの街灯は誰からも愛されていた。しかし、いつしか人々が去り、虫たちも「キラキラ」した「眩しい」町に去って行きます。役立つ存在だと信じていた街灯は、誰かを必要としていたのは自分だと気づきません。「紺と橙がお互いを押し合ったり引いたりしながらまざりあって」といった随所に見られる「光と闇」の描写、そこに様々な心理を重ねる表現力の高さに感心しました。

やえがしなおこ

主人公の街灯が、その光を失っていくラストが美しくさみしい。自分の光におさっていた一生の終わりに、誰かを必要としていたのは自分だったと気づくという設定が、切なく心に残った。自身の光を失って、初めて月の光の美しさに心打たれる場面が圧巻。おとぎ話風でありながら、光と闇の描写に生きるこの意味を考へさせられる作品。

銀

賞

『命の花』

命の花

東京都 共立女子高等学校二年 星野明希

ぼくは六歳。兄ちゃんと、二人きりで暮らしている。父ちゃんは、ぼくが生まれる前に、死んでしまって、母ちゃんはぼくが生まれてすぐに病気になった。ぼくの家は山の中だから、兄ちゃんがどれだけ走っても、お医者さんと呼ぶのには時間がかかった。それで母ちゃんは死んでしまった。兄ちゃんは十五歳、ぼくはまだ三歳だった。

短い草がたくさん生えた庭と、家を囲む森の木々、森を少し進むと、大きな池がある。ぼくが遊ぶには十分な家だ。家の後ろには小麦畑と、父ちゃんと母ちゃんのお墓が並んでいるが、ぼくはほとんどそこには行かない。兄ちゃんはいつも家の横に立つ東屋で小麦を石臼で挽いていて、その小麦粉を背負って二週間に一度、街に降りてそれを売る。その日は朝早くに兄ちゃんは家を出て、星が綺麗に見える頃に帰ってくる。

ある日のことだった。ぼくが木の枝にぶら下がっていると、それは急に折れてしまった。膝が擦りむけて真っ赤に滲んだ。ぼくが泣いていると、兄ちゃんは森に出てきてくれた。東屋にぼくの声が届いたのだろう。ぼくの手を引く兄ちゃんの手は白かったから、小麦を挽く手を止めてきてくれたんだと思った。兄ちゃんに連れられて家の中に入ると、兄ちゃんはぼくの膝を冷たい水で洗い流して、干切った布を巻きつけてくれた。水は足に染み込んでぼくは泣き声を大きくしたが、兄ちゃんはやめてはくれなかった。ぼくは知ってる。兄ちゃんは怪我や病気に敏感だ。サイキンが入らないように、と口癖のように言う。それでもぼくは外を走り回るのが大好きで、い

つも全身を泥だらけにしては兄ちゃんを困らせている。

「それ、どうしたんだ？ 拾ったのか？」

兄ちゃんはぼくが握っている小枝に目を移した。

「ううん、ぶら下がってたら折れちゃったんだ」

ぼくは正直に話した。すると兄ちゃんは、じゃあサシキをやらなきゃな、とぼくの手を引いて外へ出た。庭の真ん中の地面に穴を掘って、小枝を植える。

「これでこの小枝は生き返る」

兄ちゃんは満足げに言った。ぼくにはいまいちよくわからなかったけれど、兄ちゃんが嬉しそうならそれでいいやと思った。

兄ちゃんの言葉の意味がわかったのは、それから間もなく経った頃だった。植えた小枝から新しい葉が生えていたのだ。ぼくは嬉しくなって、枝の周りを跳ね回った。兄ちゃんは、正しい処置をすれば、無事に戻ると言った。

それから数日後、ぼくが森の中を歩き回っていると、鳥が立っていた。ぼくはいつものように追い回そうとその鳥に近づいて行った。しかし鳥はいつものように飛び立ったり、走って逃げたりはしない。じっと止まって、首だけをぼくに向けた。真っ赤な目だった。灰色の羽毛の中で、それは光って見えた。ぼくは怖くなって、少し鳥から離れた。鳥はぼくには興味もなさそうに、首も向きを戻して、どこか遠くを見ている。その時気がついた。その鳥は片足だった。血も垂れていないから、ずっと前に取ってしまったのかもしれない。ぼくはいっそう怖くなって、走って逃げ出した。それから兄ちゃんにそのことを話した。すると兄ちゃんは森の中に入っていっ

て、そしてさっきの鳥を抱えて帰ってきた。ぼくは怖くて、小麦の入った袋の後ろにしゃがみ込んだ。兄ちゃんは、すっかり緑の葉が生えた小枝の木のそばに穴を掘って、その鳥を入れた。兄ちゃんはそっと土を被せて家の中へ戻っていった。ぼくは土が膨らんだところにそっと近づいた。ここにはさっきの鳥がいる。ぼくは笑顔で森の中へ遊びに戻った。

片足の鳥と出会って一週間以上経った。ぼくは土を見つめていたが、痺れを切らしてその土を掘った。穴は思ったより深く掘られていて、鳥を見つけるのには長くかかった。ようやく、土色じゃないものを見つけてぼくは懸命に土を払った。そこにいた鳥は最初よりずっと醜く、怖かった。ぼくは驚いて大声で泣きながら兄ちゃんのところへ逃げた。兄ちゃんは土まみれのぼくをお風呂に入れて、それから話を聞いてくれた。ぼくはしゃくりながら兄ちゃんに訴えた。

「と、鳥がね、い、いきかえ、らなくて、ね」

兄ちゃんはぼくの顔を優しく撫でていたが、急にそれをやめて外に駆け出した。それからしばらくぼくはポカポカと兄ちゃんの跡を見つめていた。

帰ってきた兄ちゃんは手を土色にしていて、怒った顔をしていた。

「なんで掘り返したりなんてしたんだ!!」

ぼくを見るなり兄ちゃんはぼくを怒鳴りつけた。ぼくはもっと悲しくなって、声をあげて泣いた。

「だって、ちゃんと、すれば、生き返る、って」

もう涙で兄ちゃんの顔も見れなかった。怒った顔だけが目の向こうに張り付いている。水が流れる音がして兄ちゃんはぼくを抱きしめた。

「……ごめん。俺の言い方が悪かった。生き物は生き返らない。墓を掘り起こすのは悪者がすることだ。天へと向かっているものを起こしてはいけない。もう二度としないと約束してくれ」

ぼくは何度も頷いた。兄ちゃんの声はいつもの優しい声よりちよつと低かったけど、ぼくはただ頷き続けた。

次の日、ぼくは森の中で折れた一輪の花を見つけた。それは赤色の大きな花びらが五枚ついていて、真ん中は黄色の花粉がキラキラしていた。見たことがない花だったけど、とても美しい花だ。大きな木は森の中を日陰にしてくれるのに、そこだけが輝いて見えた。ぼくは、その折れた花を持って庭へ戻った。そして片足鳥のお墓の横に植えた。植物は生き返ると知っていたからだ。水をあげて一夜経つと、その花は綺麗に咲き誇っていた。ぼくは満足して、家の中で過ごした。空は曇っていて、そのうち雨が降ると思ったからだ。雨はすぐに降り始めた。今日は兄ちゃんが街で小麦を売っているからぼくは家で一人きりだった。兄ちゃんの代わりに、家中の埃を箒で集めたり、雑巾で磨いたり、お風呂もピカピカにした。

兄ちゃんが帰って来た頃には雨はすっかり止んでいた。ぼくがいつもの通り玄関で出迎えると、兄ちゃんは顔を曇らせていた。

「お前、またやったのか？」

兄ちゃんの声はすごく怒っていた。兄ちゃんはぼくのことを「お前」だなんて言わない。きつと凄く怒っているけれど、何に怒っているのかさっぱりわからなかった。

「なんのこと？」

ぼくはそう尋ねるしかなかった。兄ちゃんは顔を歪ませる。

「また墓を掘り返したのか？」

全く身に覚えがなかった。兄ちゃんに駄目と言われたことを繰り返したりしない。そう言いたかったけど、怖くて鼻がツンとして、首を一生懸命に振った。兄ちゃんはぼくに靴を履かせて、一緒に家を出た。片足鳥の墓にぽっかり穴が空いていて、それを覗き込んでも、鳥はいなかった。ぼくは兄ちゃんを見上げて首を振った。兄ちゃんは怪訝そうにぼくを見つめたが、もうこのことには触れなかった。静かな夕食が終わってぼくは眠りについた。

鳥が立っている。灰色の羽毛に埋もれた真つ赤な目。じっと空を見つめている。

「君はどっかにいるの？」

鳥はぼくの方をちらりと見ると、再び空に視線を戻した。それから鳥はぼくの問いかけに答えてくれはしなかった。

起きてすぐに、ぼくは森の中を駆けた。そして、一羽の鳥を見つけた。あの日の鳥だった。夢で見た鳥だった。しかし一つだけ違った。その鳥は空ではなくぼくをじっと見つめていた。そして、そのまま空に飛び立った。相変わらず片足だったが、その鳥は大空に羽ばたいていった。ぼくは確信した。あの鳥は生き返ったのだ。

ぼくは庭のお墓の元へと戻った。穴は埋められていた。多分兄ちゃんがそうしたんだと思った。ぼくはお墓の周りを観察した。特に変わったことはない。ふと視線を動かすと、赤い花の輝きが増して見えた。そういえばこの花を植えたのは一昨日のことだ。試してみよう。ぼくは森の中へ駆け出した。

森を少し抜けたところにある池のほとりで、ぼくは早速カエルを見つけた。その体は紫色で、草に張り付いたままになっている。ぼくは勇気を振り絞ってそれを掴むと、一目散に家へと帰り、赤い花の隣に埋めた。

次の日、カエルのお墓はやっぱり穴が空いていて、空っぽだった。ぼくは兄ちゃんに教えてあげようと、今度

は東屋に向かった。兄ちゃんはいつものように収穫した小麦を粉にしていた。「ぼくわかったんだー！」

不思議そうな顔の兄ちゃんの腕を引いて、ぼくは赤い花の前まで連れていった。森で花を見つけて植えたこと、鳥を再び見つけたこと、カエルもいなくなったこと、ぼくは興奮しながら兄ちゃんに言いつて聞かせた。兄ちゃんはまだ信じられなさそうだったが、ぼくの言葉を受け入れてくれた。

それから庭には時々動物たちのお墓が並ぶようになった。兄ちゃんは植物の棘が刺さった動物の棘を抜いて、少し綺麗に洗ってやってから花の横に埋めた。次の日には穴は空になっていた。するとぼくは森の中で元気に生きている動物を見ることができた。ぼくは嬉しくなった。

また兄ちゃんは街へ行つた。ぼくは家で一人きり、花の周りを眺めていた。今は動物のお墓はない。一昨日、木から落ちてしまっていたリスが昨日いなくなったぎりだ。ぼくは花をじっと見た。赤い花びらも花粉もキラキラしていた。艶々とした大きく滑らかな赤い花びらを眺めているうちに、ぼくはあることに気がついた。

土を少しずつ掘って、花を根っこごと抜くと、ぼくは家の反対側へ向かった。そこには父ちゃんと母ちゃんのお墓がある。ぼくは母ちゃんのお墓の横に赤い花を植え直して、水をたっぷりかけてやった。それから家事を済ませると、森に入って一日中遊びまわつた。お風呂からあがって兄ちゃんを待っているうちにぼくは眠くなつて、布団にも行かずに眠つてしまつた。

赤い花が咲き誇っている。大輪を空に向けて、キラキラと輝いている。その花びらは、少しずつ色を濃くしていたが、しばらくすると、中央から白っぽくなつていった。

起きると、ぼくは布団の中にいた。兄ちゃんが運んでくれたのだろう。ぼくは急いで靴を履いて、家の裏側へ

走った。

「なんで？」

そこに赤い花はなかった。今度は東屋へ走る。兄ちゃんはそこで手を真つ白にしていた。

「おはよう！」

いつものように挨拶をする兄ちゃんに、ぼくは花がなくなったことを話した。

「なくなったのか？ 裏のお墓の土と、相性が悪かったんじゃないのか？」

ぼくは兄ちゃんを見上げる。

「ぼくは、裏のお墓に植え替えたなんて言っていないよ？」

兄ちゃんの顔が強張った。

「兄ちゃんが抜いたんだ！ 兄ちゃんが！ ぼくの花をなんでそんなことしたんだよ!!」

ぼくは兄ちゃんの腕を殴った。視界がぼやけていたが、その手は止めなかった。兄ちゃんは抵抗もせず殴られるものだから、それがもつと憎らしくてぼくは殴る力を強くした。

「あの花は、俺たちのものじゃない」

ようやく聞いた兄ちゃんの声は落ち着きはらっていて、ぼくは思わずその手を止めた。兄ちゃんの手がぼくの顔を拭く。

「俺も、惨く死んでしまった生き物を生き返らせるのはいいことなんじゃないかって思っていたんだ。でも昨日花がなくなっていたときにすぐに気がついた。俺も、少し思っていたんだ、同じことを。そしてわかった。これは駄目なことなんだと。生命は神様が与えてくれるもの。それを俺たち人間がどうこうしちゃいけない」

兄ちゃんの顔は苦しそうだった。

「駄目なんだ。お前もわかるだろう?」

ぼくは兄ちゃんの言葉をじっと聞いていた。そのうち涙が溢れてきて、再びぼくは声をあげて泣いた。兄ちゃんはぼくの背中をさすってくれた。途中ぼくの頭に何度か雫が落ちたけど、見上げた空は晴れ渡っていた。

ぼくが落ち着くと、兄ちゃんはぼくに顔を洗わせて、それから家の外へ連れ出した。兄ちゃんは東屋の中から大きく、そして赤い、あの花を持ってきた。

「この花を燃やそうと思っ」

兄ちゃんはぼくに言った。兄ちゃんはやっぱり優しい。ぼくが寝ている間に燃やすこともできたのに、ぼくに言うために待っていてくれたんだ。ぼくは頷いた。兄ちゃんは花にマッチで火を放った。花はあつけなく燃えた。生物に命を与える魔法の花は、跡形もなく燃えさつて、そこには輝く灰だけが残った。兄ちゃんはその灰を小枝の木に撒いた。

その夜、強い雨が降った。聞いたことのない水の跳ねる音が外で響いていた。

木が一本ある。陽に照らされて、水を吸収して、大きく、大きく空に向かって生えていく。

ぼくは窓から差し込む日の光で目が覚めた。それから靴を履いて、玄関の扉を開けた途端、ぼくは足を止めた。小枝だった木は、大きな木になっていた。森の木よりも頭ひとつ分大きい木だ。そしてそのそばに膨らんだ土がいくつもあった。そこには木の棒が立てられていて、「片足の鳥」とか「カエル」とか書いてあった。魔法の花がなくなってしまったから、命も元に戻ってしまったのかもしれない。立て札は兄ちゃんが書いたのだろう。大樹は、それらを休ませるように大きな陰を作っていた。気がつけば兄ちゃんがぼくの横にいて、手を合わ

せていた。ぼくもそうした。二人で長いことそうしていた。



選考委員コメント

『命の花』

石野

晶

兄と弟。二人きりの物語りです。民話風の世界観で子供の目線で進むため、淡々と物語りが進んでいくように思いますが、何が起きているのか気づいた時、先を予想して背中が寒くなりました。だけど弟のやることしたことは、兄によって無事に阻止され、ほっと胸を撫で下ろしました。兄の語る言葉こそが、命の本質なのだと思いました。

牛崎

敏哉

十八歳の兄と六歳の弟が、たった二人で社会とほぼ隔絶した生活をおくっているという設定。賢治童話「黄色のトマト」を彷彿とさせるが、こちらは現実との接点における価値観の違いが描かれていた。本作は、閉ざされた兄弟の空間に死と蘇りの呪術めいた赤い花が登場する。兄の死生観が物語の展開を決めていくが、そこに至る兄の造形が書き込まれないのが残念。

夏井

敬雄

両親を亡くした兄弟は森の木々に囲まれた家に二人だけで住んでいる。弟は生き物を生き返らせる力を持つ赤い花を見つけ、死んだ動物たちを生き返らせているうちに、その花を両親の墓に植え直してしまう。弟に対して、兄は「これは駄目なことなんだ。」と言い、赤い花を燃やしてしまう。物語の最後の場面、「大樹は（動物たちの墓に眠る命）を休ませるように大きな陰を作っていた」という秀逸な表現によって、生と死の両面があつてこそ「命」なんだと気づかされる。

やえがしなお……山の中で二人きりで暮らす兄弟の、幻想的な物語。挿し木、死んだ鳥や両親など、命というテーマを中心に、幼い弟の心の動きと、良識ある兄の行動が、物語性を深めている。命を蘇らせるという花の存在は、怪しく美しい。「生命は神様が与えてくれるもの」と諭す兄の言葉に続く最後は、しんみりと心に残った。

銀

賞

『悠久の手紙』

悠久の手紙

兵庫県 神戸星城高等学校二年 眞弓 璃子

ぼくが不思議な文通を始めたのは、中学二年生の秋だった。帰宅部だったぼくは、授業が終わるとすぐに帰路についていた。生徒はほとんどみんな部活に行ってしまうので、ぼくが帰る時間帯の昇降口はいつも閑散としていた。夏休み明けでまだ暑い季節だったので、誰も見ていないのをいいことにシャツの第二ボタンを外しながら、靴箱を開けた。

目に入ったのは、ぼくのスニーカーの上に鎮座している、一通の手紙だった。「コピー用紙よりも少し分厚く、ざらざらしている。ひっくり返しても名前はない。恐々開いてみる。」

『ひびくつらまゆか』

幼児のような拙いひらがなで、それだけが書かれていた。差出人も宛名もない。もしかしたら、間違っただけなのかもしれない。

無視してもよかったのだが、この手紙の送り主は、再びぼくの靴箱を覗くだろう——そんな確信が、なぜかあった。不自然な引力だった。ぼくは適当なノートをリュックから引っ張り出し、端を破いてこう書きつけた。

『届くしまゆか』

靴を履き替え、そのメモを上履きの上に乗せて、ぼくは校舎を出た。やっぱり友達のいたずらだったかも、と不安に思ったが、翌朝登校して、それが杞憂だったことを知った。靴箱のメモが消えて、代わりに昨日と同じ封

筒が入っていたのだ。ぼくは誰にもばれないように、ポケットに手紙をねじ込んだ。自分の教室がある二階まで二段飛ばしで駆け上がり、席に荷物を置いて男子トイレに駆け込む。

手紙は昨日のよたよたしたひらがなとは対照的に、鮮やかな筆記体の英語——恐らく——で書かれていた。内容はずつぱりだ。

どうしよう、と思う間もなく、ホームルーム前の予鈴が鳴る。手紙を封筒ごと、丁寧に二つ折りにして、ポケットに突っ込む。

その日の授業はずつと上の空だった。

家に帰ったぼくは着替えるよりも先に、スマホで手紙の写真を撮った。写真から文章を読み取って、翻訳してくれるサイトを開く。

その手紙にはどうやら、英語でこんなことが書いてあるらしかった。

『あなたのポストと私のポストとを勝手に接続したことを許してください。私はあなたとは違う星に住んでいます。もし、この手紙を受け取ったなら、また返事が欲しいです』

いたずらにしてはよくできた手紙だな、と、ぼくは返事を考え始めた。別に、誰かのいたずらでもよかったのだ。日常の繰り返しに、こんなおとぎ話のようなことが起こるなんて。

ぼくは英語は得意ではない。考えた内容を翻訳サイトに入力し、それをそのまま、破ったノートの一ページに書き写す。

『あなたはどこに住んでいますか？　ぼくは地球という星です。あなたはなぜ地球の言葉である英語を話せる

んですか？ ポストを繋げたというのはどういうことですか？ あなたは誰ですか？ 返事待ってます』
ぼくは手紙を四つに折って、忘れないように、制服のズボンのポケットに突っ込んだ。

翌朝、ぼくは、書いた手紙をスニーカーの上に置いた。放課後には返事が来るだろうか。
授業が終わってすぐに昇降口へ行くと、スニーカーの上に、また封筒が乗っかっていた。

家に帰って写真を撮り、翻訳サイトを開く。

『ごめんなさい。私は名乗ることができない。ごめんなさい。私はこの言語を、ある人間から教わりました。
地球から来た彼は私達の言葉を学び、私達とコミュニケーションを取り、私達の言葉で、私に地球の言語を教えてくださいました。私のポストは、彼にもらったものです。宇宙空間の中で、指定した座標にものを送ります。私はでたための座標を指定しました。だから、返事が来ると思っています。あなたは私の隣人です。どうかこれからも、手紙を続けてください』

その手紙からは何か、ある種の切実な運命が感じられた。どこにもそんなことは書いていないのに、なぜか、送り主は孤独なのもかもしれないという考えが頭の中を巡っては消え、また現れる。広大な宇宙で、相手の言う「でたための座標」が指し示したのがぼくの靴箱だったことに、意味はないかもしれないが、意味のあることだけが運命ではないだろう。

『わかりました。手紙を続けます。ぼくたちは会うことはできないかもしれないけど、隣人です。あなたの星のことを色々教えてください。返事を楽しみにしています』

ぼく達の文通は、翻訳サイトを介して続いていた。朝、手紙を靴箱に入れておくと、夕方にはもう返事が来ている。持ち帰って返事を考え、翌朝また手紙を靴箱へ……そんなサイクルがしばらく続いた。

彼（性別さえわからないが、この先、送り主のことは便宜上こう呼ぶ）の星は、想像もできないほど遠くにあるらしかった。彼に英語を教えた人物はもう亡くなっているらしい。その人がなぜ彼の星まで行くことができたのかは彼も知らないようで謎のままだったが、近況や、お互いの星のことを教え合うのは、重大な秘密を抱えているようで楽しかった。

あるとき、彼が自分の星を「美しい水と、空と、色とりどりの花と、争いのある星です」と表したことがある。ぼくが彼に孤独を感じた理由が、そこに詰まっている気がした。

葉がもうすっかり色づき、本格的に秋めいてきたある日、ぼくだけの秘密の文通は、たったの三週間で終わりを告げた。

いつものように靴箱に手紙が入っていることを確認したぼくは、周りに誰もいないのをいいことに、その場で手紙を開いていた。紙にびっしり並べられた流麗な文字列を見て、ニヤニヤしていたのだ。

「なんだか嬉しそうですね」と、横からかけられた穏やかな声に驚いて、ぼくは手紙を取り落とした。紙がひらひらと舞う。

「あっ、ごめんなさい。驚かせましたね」

手紙を拾ったのは、隣のクラスの担任である、大西先生という中年の女の先生だった。担当教科は英語だ。優しく授業も面白いので、一部の生徒からは「おおにっちゃん」と呼ばれているほど、人気のある先生だった。

声をかけられるまで、気配にすら気づかなかったことを反省しながら、手紙を受け取ろうとして、ぼくは動き

を止めた。大西先生が目を丸くして、手紙を凝視していたからだ。

先生はしばらく手紙を見て「これ、君が書いたんですか？」と顔を上げた。ぼくは誤魔化せないということを感じて正直に言う。

「いえ、違います。文通してるんです」

「文通？ ……英語で？」

「はう」

ぼくは事の一切を先生に話した。先生は時折頷きながら黙って聞いていたが、ぼくが話し終わると「それ、先生にもお手伝いさせてくれませんか」とぼくに笑いかけた。

「お手伝いするので、翻訳機を使わずに返事を考えてみませんか。英語の勉強にもなりますよ、きっと」
「……ぼくにできるでしょうか」

「うーん、最初のうちは大変かもしれませんが、君は部活もやっていませんし……いえ、無理には言いませんが……秘密の文通、先生も興味があります。どうですか？」

ぼくは頷いた。挑戦したい。少し面倒くさいけれど、その方が気持ちも伝わる気がする。

先生は満足そうに「ありがとう」と再び笑った。ぼくだけの秘密の文通は、ぼくと先生、二人だけの秘密の文通になったのだ。

ぼくと先生の秘密の手紙講座は、授業が終わった後、図書室で行われることになった。放課後の貸し出しチェックは図書委員会の顧問である大西先生の担当なので、人目につかない場所を、と先生が提案してくれたの

だ。

大西先生が今までの手紙を見せてくれと言ったので、文通のことがばれた翌日、計十三通の手紙を先生に手渡した。

ぼくの向かいの席で、十三通分を黙々と、しかしスラスラと読んでいた先生は、最後の一通を読み終えてふと顔を上げ、首を傾げた。

「君の靴箱が、送り主の言う『ポスト』の代わりということですよね？」

「そつだと思えます」

「不思議なこともあるものですね」

話を続けるのを少しだけためらうような素振りを見せてから、先生はぼくから目をそらして、うつすら笑った。

「悪いけど、君は、英語の成績はあまりよくありませんよね」

「そんなにはつきり言わないでください」

「あはは、ごめんさい。いや、手紙を書くうちに成績なんてポンと上がりますよ。来年は受験生ですし、頑張りましょうね」

頷く。そうなのだ。来年は受験生だから、もしかしたら、手紙を書く暇なんてなくなるかもしれない。そもそも靴箱がポストである時点で、ぼくが中学校を卒業したら、嫌でも文通は終わる。ぼく達は刹那の隣人だった。

その日は先生に文法や単語を教えてもらいながら、こつこつという手紙を書いた。

『ぼくは英語が得意ではありません。実は今まで翻訳機を使っていました。でも、今日からは、英語の先生に教えてもらいながら、自力で文章を書くようにします。読みにくくなると思いますが、よろしくお願いします』

消しては書いてを繰り返したので、紙はよれたし、黒ずんでいたし、書くのに一時間もかかった。しかし、先生が「いいと思いますよ」とお墨付きすみつきをくれたので、自信は持てた。

手紙を靴箱に入れて校舎を出る頃には、もう五時を回っており、日も傾き始めていた。いつもより頭を使ったはずなのに、疲つかれてはいない。ぼくは足取り軽く、帰路についた。

彼は、ぼくが自力で手紙を書くということ聞き、「これからあなたの心からの言葉が聞けることを嬉しく思います」と喜んでた。

それからは今までのサイクルが逆になった。放課後、ぼくが先生と一緒に手紙を書いて靴箱に入れておくと、翌朝に返事が届いている。初めの頃は違和感いわかんがあつたが、半年もすればその違和感はすっかりなくなっていた。

四月、ぼくは順調に三年生になった。担任は二年生の時と同じで、大西先生はまた隣のクラスの担任だ。靴箱は三年間同じ場所を使うので、文通は続く。

ぼくは進級した日の手紙にこう書いた。

『ぼくは今年、大切な試験があります。そのための勉強をするので、今までのようなペースでは、手紙を出せないかもしれません。でも、できるだけ返します。なので、これからも手紙を送り続けてくれると嬉しいです』

一年後にはもう、ぼくは中学校を卒業するので、文通はできなくなりませう——それは言わなかった。先生は「早く言ったほうが、自分も相手もショックを受けずに済みますよ」と言ったが、ぼくは意志を変えなかった。まだ先なんだから、伝えるのはもつと後でいい。そう思っていたからだ。

そして、翌日、返事は来なかった。

春休み中は毎日学校に来ることができず文通が不定期になっていたもので、その名残だろうと特に気にしていなかったのだが、返事は何日経っても来なかった。怒ったのだろうか。

手紙を送ってから一週間後の朝、靴箱を開けたばくは、ほっとした。手紙がある。放課後をあれほど待ち遠しく感じたのは初めてだった。封筒には便箋以外の何かも入っているようで、普段より重く、そして膨らんでいた。放課後、図書室でいつものように先生と向かい合って、手紙を開封する。

『そうなんです。あなたの試験が成功することを心から願っています。お守り代わりと言ってはなんです。星の石を送ります。これを渡すために探し回っていたら、返事が遅れてしまいました。ごめんなさい』

どつやら、怒ってはいないらしい。それどころか、プレゼントも貰ってしまった。

封筒から、便箋といっしょに滑り出た「星の石」は手のひらサイズで、青い半透明で、ごつごつしていた。蛍光灯の光を反射して、キラキラと光る。先生は子供のよな表情で「いいなあ」と、うっとり石を見つめた。

「宇宙から来た石ですよ。大事になさい」

「やう」

ぼくは素直に頷いた。今まで貰ったどんなプレゼントよりも嬉しかった。

今日の手紙は石のお礼と、受験のことを書こう。そう思って、パンケースを漁っていると、先生が「あれっ」と声を上げた。

「これ、続きがありますよ。一枚目が」

えっ、と声が漏れる。そんなこと、初めてだった。なんだか嫌な予感がする。

『言おうか迷ったのですが、あなたには打ち明けます。実は先日、召集命令が私に届きました。戦争です。無

駄な争いです。私は行かなければいけません。あなたと同じように、私もまた、手紙を出す頻度は落ちるでしょう。でも、あなたも送り続けてください。あなたからの手紙は、きっと私に勇気を与えます』

彼の言った通り、彼から手紙が来る頻度はぐっと下がった。それでも、ぼくはできるだけ手紙を書き続けた。夏になると、塾に通い始めたり、高校の見学会に行ったりするようになった。日常は穏やかに通り過ぎていった。ぼくの生活の様子なんて、そんな脳天気なことを書いていいものかと思っただが、彼は言ったのだ。ぼくの手紙が、彼に勇気を与えると。だから、どれだけ彼のことが気になっても、いつもと調子が変わらないように心がけた。

蒸し暑い夏の朝、やはり靴箱に返事が来ていないことに寂しさを覚えながら、いつものように登校すると、なんだか教室が騒がしい。先に来ていた友達の肩を叩き、何があつたのかと尋ねると、そいつは興奮気味に「おおにつちゃん倒れたんだって!」と叫んだ。

そのときぼくがぐらっとしたのは、夏の暑さのせいばかりではない。

大西先生は学校に来なくなった。病を患ったそうだ。しばらく入院して療養する、という話を集会で学年主任から聞かされ、代理の英語の先生が紹介された。若くて綺麗な女の先生だった。友達はみんな、新しい先生に英語を教えてもらえることを喜んでいて。手紙のことを話そうか迷ったが、言わなかった。

一人では図書室に行く気にもなれず、久々に真つ直ぐ家に帰ったぼくは、お母さんの「あれ、今日は早いね」という言葉に、うん、とも、ううん、ともつかないような返事をして、自分の部屋に入った。

彼の星では、戦争が激しくなっているらしい。手紙は、一ヶ月に一度、届くか届かないかの頻度になっていた。なかなか家に帰れないのだそうだ。彼の家族か機械か、誰が回収しているのかはわからないが、それでも手紙は毎日回収される。その事実だけが、ぼくと彼とを繋ぎ止めてくれた。たまに届く彼からの手紙に近況きんきょうが書かれることはほとんどなく、ぼくの手紙に言及げんきつする内容ばかりだった。それでもよかった。生きてさえいてくれれば。

ぼくの手紙は、どれだけ彼の支えになれただろうか。彼はぼくの手紙を待っていてくれる。ならば、ぼくが顔も知らない彼にできることはただひとつ、手紙を書き続けることだ。

季節はぼくを乗せて、止まることなく進む。いつしか文通を始めて、一年以上が経っていた。冬、受験が近づいて、みんなピリピリしていた。ぼくは勉強の合間を縫ぬって手紙を書いた。受験勉強で英語に苦労させられずに済んだのは、そのおかげだろうか。

季節は進む。止まることなく。ぼくは受験に合格した。合格したことを中学校に伝えに行くと、担任の先生はとても喜んでくれた。大西先生のことを聞くと、先生は首を傾げて「あまり思わしくないそうだ。なんか、手術がどうとか」とあやふやな返事をぼくにくれた。先生も、詳しくは知らないらしい。

ぼくは先生にもう一つ聞いた。

「あの、図書室って開いていますか？」

図書室に来るのも半年ぶりだ。大西先生の代わりに、ベテランのおじいちゃん先生が貸し出しの担当になって

いた。カウンターに会釈えしやくをして、お気に入りの席せきに腰を下ろす。ペンケースと便箋を机の上に広げる。

『お元氣ですか、ぼくは元氣です。最近手紙を書けていなくてすみません。』

試験に合格しました。あなたがくれた石のおかげです。星の石が、どんなときもぼくを勇気づけてくれました。あの石が、あなたの代わりにぼくを応援おうえんしてくれているような気がしていました。

実は、もうすぐぼくは、あなたとの文通を終えなければいけません。新しい環境かんげいに進むからです。ぼくのポストは、新しい人が使うことになりました。次の人が、あなたの手紙に返事を書くかどうかはわかりません。

あなたの手紙の内容は知らないことばかりで、とても楽しかったです。嬉しかったです。

名前も声も知らないけれど、それでもぼくは、あなたのことを友達だと思っています。

今までありがとう。感謝の気持ちを込めて、地球の花を送ります。

あと少しの間、よろしくお願いします。』

ぼくは封筒に便箋と、いつの間にか咲いていた梅の押し花おひなのしおりを入れて、封をした。

大西先生は卒業式に来なかった。

その日は小雨が降っていて、咲き始めたばかりの桜の花を散らしていた。三年間過ごした校舎と別れるのも、友達と進路しんろが離れるはなるのも悲しかったが、それ以上に、ぼくは手紙の返事が気になった。今日で最後なのだから。

押し花を送った後、返事は一通も来ていない。でも、ぼくは、ほとんど毎日手紙を書いて、彼に送った。たかが紙切れ一枚だが、されど紙切れ一枚なのだ。それはぼくだけでなく、彼にとっても同じだっただろう。

昨日も、手紙は送った。返事は来ているだろうか。最後だからと教室で騒ぎ立てる友達をよそに「親が待つて

るから」と嘘をついて、ぼくは一人でそとと教室を抜け出した。

昇降口への階段を駆け下り、靴箱を開ける。

思わず息を呑んだ。

手紙が入っている。

震える手で触れてみると、やはりざらざらしていた。裏返してみても勿論、名前はない。鼓動がどんどん早くなって、顔が熱くなってくる。辺りはしんと静まり返っていた。

破いてしまわないように、ゆっくり開封する。そこにいつものしなやかな筆記体の文字列はなく、ただ、短い言葉だけが並んでいた。

ぼくは便箋を封筒に戻し、潰れないように、丁寧に鞆に入れた。

卒業式から帰ってきて、ぼくはすぐに便箋を出した。大西先生に手紙を書こう。

遠い遠い星に送った手紙は、時空を超えて、彼を助けただろう。彼がぼくを支えたのと同じように。ならばもっと近く、手の届くところにいる人にも、ぼくは力を渡せるはずだ。

ぼくは不思議な運命を持っている。誰かを支える力を。ぼくだけではない。生きているもの、宇宙に存在しているものすべて、不思議な引力を持っているのだ。時に離れてしまつことがあっても、いつか必ず再び引き合う。きっとまた会える。そう信じている。

最後の手紙には、震えた小さな日本語で、これだけが書かれていた。

あなたの返信に 心より感謝を
ありがとう いちばん遠い 友人よ



選考委員コメント

『悠久の手紙』

石野

晶

靴箱の中が他の星と繋がるポストとなり、顔も知らない相手との文通が始まる。この設定だけで、わくわくします。欲を言つたらば、手紙の内容を細かく書いて、相手の背景をもつ少し知りたかったところです。手紙が自分の支えとなってきたのだから、自分の手紙も相手を支える力となるはずだと信じられたことがよかったです。

牛崎

敏哉

宇宙人との不思議な文通という書き出しに引き付けられる。これがSNSでハンドルネームが「宇宙人」だとしたら、この物語は成立しないだろう。しかも英語でのやりとりで大西先生が参画してくるというのもアナログでユニーク。期待は膨らむものの、文通は中学卒業までと期限付きとされ、更に大西先生は突然病気でリタイヤという展開には「工夫欲しかった」。

夏井

敬雄

電子メールの現代に、なぜ「文通」なのか？ 差出人も宛名もない一通の手紙、しかも手書きの手紙が靴箱に入っている。相手は孤独な異星人。秘密の文通に、後に病で学校から離れる大西先生を参入させ、文通のもつ閉塞感を緩和させたり、異星人が戦争への召集する展開によって、同時代性を描いたりする工夫がある。アナログ的な手紙のやりとりだからこそ想像をかき立て、伝わってくるものがある。

やえがしなおこ……地球外の生命と文通を始めるという設定が非凡で説得力があり、最後まで引きこまれて読んだ。遠い星の文通相手と、文通を助けてくれる教師、それぞれとの関わりが並行して描かれるのもおもしろい。遠い星でも戦争や召集令状があることは衝撃的で悲しいが、生きているもの同士が支えあう力について触れた最後は力強い。

銀

賞

『凍み炭団』

凍み炭団（しみたどん）

島根県 出雲高等学校二年 内部 泰成

「寒さが凍みいなあ」

村の外れ、雪がしんしんと降る帰りの山道。十兵衛はかじかんだ手に白い息を吐いた。寒さよけのミノをはおつてはいるが、そこら中に穴があいて、時折ひゅつと雪が入ってくる。早いとこ、新しいミノを調達しなくては。ずいぶん前からそう思っているが、中々できない。

十兵衛は、山奥で炭焼きをして暮らしている。冬のこの時期になると、もっぱら炭団を麓の村に売りに出て生計を立てていた。十兵衛の炭団は火持ちが良いからと村人たちの間でも重宝された。山を下りれば、炭団を買おうとする村人の列ができるほどだった。

しかし、それも昔の話だ。近頃は、どうやら外から行商が来るらしい。しかも、十兵衛よりべらぼうに安く炭団を売っているという噂だ。当然ではあるが、十兵衛の方はというと、とんと炭団が売れなくなってしまったのだった。

今日も変わりはなかった。あぜ道を歩いていると、通りすがりの母子に出会った。十兵衛は「炭団は要らんですか」と声をかけようとしたが、その母親は露骨に嫌そうな顔をこちらに向けて、足早に去っていった。またあの老婆は、炭団こそ買え、ぶつきらぼうに「三つ」と言つて、炭団をひっかくように掴み取ると、投げつけるように金をバラ撒いていった。

十兵衛は村人たちのあまりの変わり様に戸惑っていた。行商の炭団が安いといえど、十兵衛は自分の炭団に誇りを持っていたからだ。火持ちの良さでは他のどんな炭団にも負けない。そう思っていた。しかし、現実は厳しかった。以前と変わらず十兵衛からいつも炭団を買ってくれるのは、とうとう村の庄屋さんだけになっていた。庄屋さんだけは「昔からの付き合いだから」と、十兵衛の状況を知ってか知らずか、十兵衛の持ってきた炭団は「ごっそりと買っていってくれた。ただ、そう何度も庄屋さんのところに行けるわけもないし、買い値もそこまで良いと言えるほどではなかったので、結局のところ十兵衛の生活は貧しいままなのであった。

やっとのことで重い足を上げ、十兵衛が山頂の掘り立て小屋に辿り着いた頃には、辺りはすっかり暗くなっていた。

「はあ、大分遅くなったわ。早こと炭団に火い点けんと」

十兵衛は呟いた。細々と枝を伸ばす木々が何とも寂しい雰囲気をもたらす。こんな寒い冬の夜は炭団の火で温まるのが一番だ。

十兵衛が小屋の戸に手をかけた、その時。後ろの茂みで、がさがたと音がした。振り返って目を凝らすと、そこには一匹のたぬきの姿があった。

「おお、兵吉！ おったかや」

十兵衛は嬉しそうに声を上げた。兵吉も、むくりと立ち上がると、まるまると大きな体を揺らして、十兵衛のもとに駆け寄った。

「寒かろう、寒かろう。今から炭団の火い点けけん、ほれ、入れ入れ」

十兵衛はそう言って戸を開けた。兵吉は頭をもたげて、のそりと小屋に足を踏み入れた。

十兵衛が兵吉と出会ったのは麓の村から帰る道中でのことだった。兵吉が山道で、足を怪我して歩けないでいるところを十兵衛が見かけたのだ。恐らく村人の誰かに蹴か何かで殴られたのだろう。かわいそうに思った十兵衛は兵吉を家に連れ帰り、怪我の手当をしてやった。腹をすかせている風だったのでさつまいもを分けてやると、兵吉は喜んでかぶりついた。そんなことがあってから、兵吉は十兵衛のもとによく顔を見せるようになった。「兵吉」というのは、十兵衛が自分の名前から「兵」の字を取って付けた名前だ。十兵衛は、それはもう、目に入れても痛くないほどに兵吉を可愛がったのだった。

「今日も炭団は五つしか売れらなんだつたよ。新しいミノは当分お預けだの」

十兵衛は火鉢に炭団をくべながら苦笑いして言った。兵吉は目をパチクリとさせて、十兵衛に頭を擦り寄せた。「兵吉、お前はほんにかわええのお」

十兵衛はそつと兵吉の頭をなでた。兵吉の頭はふさふさで柔らかかった。

幾分か経って、十兵衛は火箸を手に取った。灰を崩すと、中から煌煌と燃える炭団が顔を出した。炭団はじんわりと辺りを真紅に染めていく。ああ、炭団の色はいい。いつ見てもうっとりする。十兵衛は思った。膝の上の兵吉に目をやると、十兵衛と同じようにぼんやりと炭団の火を眺めていた。

なんて幸せな時間なんだろう、と十兵衛は思った。膝上の兵吉の温もり、炭団の静かな温もり。その両方が、疲れ切った十兵衛の心を癒してくれる。永遠にこのまま、この温もりが続けばどんなによいだろう。十兵衛はほのかな温もりを感じながら、やがて深い眠りに落ちていくのだった。

翌朝、十兵衛は畳の上で目を覚ました。兵吉の姿はもう無く、炭団も火鉢の中で灰に埋もれていた。

十兵衛は顔を洗って支度をする、すぐに山を発った。昨晩はかなり雪が降ったようで、戸を開けると外は一

「面真っ白に覆おほわれていた。この前雪ぐつを出しておいて良かった、と十兵衛は思った。

冬の冷たい風が顔に当たると、妙な心地良さがある。山道を歩きながら、十兵衛はどこかすっきりした気分を感じた。……ただ、今日も一つ思うところがあるとすれば、干していた炭団が少なくなっていたことだろうか。

十兵衛はいつも火鉢のそばに作った炭団を干している。山を下りるときはそれを竹籠たけかごに積み込こむのだが、どうもこの頃、その炭団が減っているように感じるのだ。もちろん気のせいかもしれないし、減っていたとて、兵吉がいたずら心で盗とっていったのだろう。どうせ売れないだし、少々減っていても別にいいか、と十兵衛は気にしないことにしていた。

麓の村はどこか活気立っていた。年の瀬せが迫せまっているからだろうか。「百姓ひやくしやうにとって休みといえれば正月しんげつ二が日くらいのものだし、新年が来るとなると誰だれしも気きがはやるのだろう。

十兵衛がいつもの道を歩いていると、何やら賑にぎやかな声が聞こえてきた。何だろうかと思つて声の方へ近づいて見ると、路肩ろかたに人だかりができています。

「はあ、あれが噂うわさの行商か」

十兵衛は立ち止まって言った。人だかりの大きさからしても、噂通り流行かひっていることが分かった。十兵衛も行つてみようとした、その瞬間しゆんかんである。人混みの中から、すっと黒い影かげが飛び出した。十兵衛は、一瞬それが何だかよく分からなかったが、その影を見て絶句けつごした。その影は十兵衛のよく見知った顔だったのだ。

「兵吉!! どうしてお前まへが……」

そう、影の正体は兵吉だったのだ。兵吉は十兵衛に気づいていないようで、十兵衛の方には脇目わきめも振らず、山の方に忽然こつぜんと消えていった。

つい昨晚身を寄せ合ったはずの兵吉が、どうしてここにいるのか。十兵衛の商売敵とも言える、この行商のところに……。十兵衛の中で不穏な思いが渦巻いた。十兵衛は呆然と立ちすくんでいたが、しばらくしてぐっと拳を握りしめ、人混みの中へ向かった。とにかく行商のもとに行ってみないことには始まらない。そう思ったのだ。「へい、買つてらっしゃい、見てらっしゃい。ここには何でも揃つてござい」

行商は若い男だった。男の言う通り、路肩にはいろいろな品が置いてあった。薄皿、木桶、木綿布……確かに生活に必要なものはみんな手に入れられそうだ。村人たちに気ななのも分かるな、と十兵衛は思った。

品物を見渡してみると、木桶の隣にやはり炭団の山があった。十兵衛は前に恐る恐るやって来て、炭団を一つ手に取った。

「違つな……」

炭団は、ごく普通の炭団だった。十兵衛は、気の抜けたように胸を撫で下ろした。

「炭団を買いに来られたんですかい？」

その時、行商の男が十兵衛に話しかけてきた。

「え、ござ……」

急なことで返事に窮した十兵衛に、男は続けた。

「そんなら、まずはこちらの炭団を試しに差し上げますよ。使ってみて、良かったらまた買ってください」

男はそう言つと、奥から炭団を二、三個取って十兵衛に渡した。十兵衛は再び言葉を失った。重厚な質感に、キラリと輝く黒色。それは正真正銘、十兵衛が作った炭団だったのだ。やっぱりか、という思いが全身を貫いた。

「これは、おらの作った炭団でねえか」

十兵衛の口からそう漏れた。

「え？」男の顔から笑みが消えた。

「聞き捨てならんな、お客さん。そりや一体どういっつた？」

男は語気を強めて言った。

「お、おらは近くの山で炭焼きをしとるもんだ。色形見ても、この炭団は間違ひなくおらが作ったもんだ」

十兵衛は負けじと返した。

「ほお、この炭団はあんたが作ったもんだと。そこまで言っんなら、ちゃんと証拠があるんだろうな？ 色形な

んかじゃなくて、誰が見ても分かる証拠だよ」

男の言葉に十兵衛はぐっと押し黙った。手間ひまかけて炭団を作っている十兵衛にとっては自分の炭団を見分けるなど、造作も無いことだ。しかし証拠を出せと言われると、それは出しようがない。

「無いだろう？ であらめ言って妨害しようつってもそつはいかねえ。迷惑だ、さっさと帰るんだな」

男は鋭く言い放った。周りにいた村人も、陰険な視線を十兵衛に向けていた。十兵衛には、もう対抗する術は無かった。村人たちの嘲笑を背後に感じながら、十兵衛は来た道を引き返すのだった。

しかし、行商の男が差し出した炭団は間違ひなく十兵衛のものだった。恐らくは、「お試し」で火持ちの良い十兵衛の炭団を村人に渡し、それ以降は普通の炭団を売る算段だったのだろう。そうやって行商は村人たちに炭団を売りつけていたのだ。

どうして兵吉が行商のところに行ったのか。その答えも、もはや想像ではなく確信に近かった。きっと兵吉もその行商の手先だったに違ひない。十兵衛の目を盗んで炭団を行商のもとに届けていたのだ。いつも炭団が減って

いるような気はしていたが、そうか、そういうことだったのか。十兵衛の中で悶々とした感情がぐるぐると駆け巡った。

十兵衛は腹わたの煮えくり返るような思いだった。昨晚も一緒に炭団の火に当たっていたというのに。兵吉は、自分の味方だと信じていたのに。……そうではなかったのだ、自分は騙されていたのだ。十兵衛の頬を一筋の涙が伝った。

やつのことで十兵衛は山の上に辿りついた。歩いていくと、視線の先に、小屋の前に立つ黒い影が見えた。兵吉だった。兵吉は十兵衛の姿に気付くと、ゆっくりと近づいてきた。

いつもなら十兵衛は「兵吉！」と叫んで駆け寄るところだ。だが、今日は違った。十兵衛は、黙って背中のかたむき手に手を伸ばした。そして、炭団を手に取り、兵吉に向かって思いきり投げつけた。

「お前はおらの味方だと思っとった。んだども、違ったんだのう、兵吉。お前は、ハナから行商の手先だったんか！」

十兵衛は怒鳴った。胸にこみ上げてくる熱いものを抑えられなかった。

炭団は、兵吉の足をかすめた。兵吉は思わず真上に跳ねた。

「もう二度と、顔を見せるな！」

十兵衛は声を振り絞って言った。

兵吉は目をパチクリと開けて驚いたような顔をしていたが、やがてもの言いたそうに十兵衛の顔を見上げた。が、十兵衛が再び籠に手をかけると、きつと踵を返して吹雪の中に消えていった。

十兵衛は帰ってからも炭団の火を点ける気にはならなかった。それどころか、炭団を見るのさえ嫌だと思っ

た。炭団を目にすると、つい胸が詰まって苦しくなってしまうのだ。

十兵衛は思い立ったように立ち上がった。雪づつに足を入れ、炭団でいっぱい竹籠を背負った。この炭団は庄屋さんにあげてしまおう。そんなもって、もう炭団を作るのは止めによろしく。十兵衛はそんなことを思いながら戸を開けた。しばらく止んでいた雪が、再びちらつき出していた。

山を下るのにそんなに時間はかからなかった。十兵衛は庄屋さんのお屋敷の前に来た。屋敷は茅葺ぎの見事な造りで、手入れされた梅やら松やらが雪をまとってなんともきれいだ。

十兵衛はそつと門をくぐり、玄関の戸に手をのばした。そのときだった。戸の奥から人の話し声が聞こえた。「……うむ、占めて銀十匁じゃな、今月の分しかと頂いた」

一人の声は庄屋の爺さんのものようだ。十兵衛は耳を戸にあてて、息を潜めた。

「いえいえ、いつも炭団のことでお世話になっていますから、銀十匁じゃあ、安いくらいですよ」

相手の声に十兵衛は思わず声を上げそうになった。声の主はあの行商の男だったのである。十兵衛は目の前が真っ暗になるような気がした。どうして行商がここにいる。「いつも炭団のことでお世話になっている」とは一体どういうことだ。庄屋さんがずっと自分から炭団を買ってくれていたのは、まさか……。

行商の男は続けた。

「そついえは、あの炭焼ぎの男が今日来た話はさっきしましたけどね、その前に変なたぬきも来たんですよ」

「ほう、たぬきかね」

「ええ、ちょうどその時は密に例の炭団を渡そうとしてたんですがね。そこにそのためぎが入ってきて、炭団を取ろうとしてきたんで」

行商の言葉に、十兵衛は自分が大変な勘違いをしてしまったことに、ようやく気付いた。あの時、兵吉は行商に炭団を渡していたのではなかった。十兵衛の炭団を目にして、それを行商から取り返そうとしていたのだ。「あんまりしつこいんで蹴り飛ばしてやったら、逃げていきましたけどねえ」

「炭団なんて欲しがるとは、そりゃあまた馬鹿なためきがおったもんだな」
庄屋と行商の二人はケタケタと笑った。

十兵衛は気づけば、山道へ駆け出していた。居ても立っても居られなかった。十兵衛は、己の勘違いを悔やんだ。どうして兵吉が行商の手先だと決めてかかってしまったのだろう。兵吉は十兵衛のために炭団を取り返そうとしていたというのに、自分は兵吉に何をした？ 炭団を投げつけ、怒鳴り散らし……。十兵衛はもの言いたげに自分を見上げた兵吉の顔を思い出した。きっと兵吉は、自分を見損なってしまっただろう。当然だ。自分はそのだけのことをしてしまったのだ。兵吉は本当に唯一の友だったというのに。

山を下りるときは止んでいた雪は、今や吹雪となって十兵衛に襲いかかる。十兵衛は、雪粒が顔に打ち付けるのも気にせず山道をひたすら上り続けた。

十兵衛は兵吉に申し訳ない思いでいっぱいだった。ただ、やはり一つ気がかりなのは、小屋の中の炭団が減っていたことだ。十兵衛以外に小屋に入れたのは兵吉だけだ。当然、炭団が少なくなっていたのは兵吉の仕業に違いなかった。でも、一体なぜ。行商に持っていったわけでないなら、一体兵吉は炭団をどこに持っていったというのか。

十兵衛が山頂の小屋に着いた時、そこには誰の姿も無かった。代わりに、白い雪の上に、今にもかき消されてしまいそうな足跡があった。それは少々変な形の足跡だった。片側だけ妙に細長い形になっているのだ。それが

何重にも重なって、森の方へ続いていた。

十兵衛は迷わず、足跡を追って走り出した。きつこの足跡が兵吉のもとに連れて行ってくれる、そう信じて。足跡は十兵衛がやっと一人通れるくらいの獣道けものみちを延々と続いていく。何度も木々の枝が十兵衛の邪魔じゃまをした。吹雪も強くなるばかりであった。

いつしか、道といえるような道はもう無かった。十兵衛はただ足跡だけを頼たよりに、吹雪の中を、森の奥へ、ひたすらに走り続けた。走りながら、叫こゑばずにはいられなかった。「兵吉、兵吉ー」と。

足跡はついに、小さな洞穴ほらあなの前で終わった。十兵衛は、身をかがめて穴に入った。そして、言葉を失い、へなへたと膝をついた。

「兵吉、そんな……」

十兵衛の目の前で、兵吉はもう冷たくなっていた。すぐそばには炭団すすだまがいくつも転がっていた。真つ黒なままの、氷のように冷たい炭団すすだまだった。

「馬鹿ばかだな。火いつけてないのに、あつたかくなるわけないだろ」

十兵衛の声は震ふるえていた。

兵吉の後ろ足に目をやると、恐らく十兵衛の炭団すすだまが当たったであろうところが不自然にへこんでいるのが分かった。十兵衛はおかしな形の足跡を思い出した。十兵衛が山を下りている間、兵吉はけがを引きずりながらも、何度も何度も小屋までやって来たのだろう。十兵衛を探して。そしてついにここで力尽ちからつききてしまったのだ。

十兵衛の目から涙なみだが溢あふれた。

「ほんとに馬鹿だよ、おらは。兵吉は、また来てくれたのに。おらは……」

続きはもう声にならなかつた。十兵衛は兵吉の上に突^つ伏^ぶして嗚咽^{おえう}を漏らした。

十兵衛にとつてそうであつたように、兵吉にとつてもまた十兵衛は唯一の友だつたのだらう。兵吉にとつても、十兵衛と炭団に身を寄せた時間は幸せなものだつたのだらう。なぜ兵吉が炭団を何度も洞穴に持ち帰つたのかも、今の十兵衛には痛いほど分かつた。

外の二つの足跡はこの吹雪ですっかり消えて、無くなつてしまつた。穴のなかでは十兵衛の悲しい、悲しいむせび声が、冷たい炭団に静かに響^{ひび}くだけであつた。



選考委員コメント

『凍み炭団』

石野

晶

炭焼きをする十兵衛の生活がりがていねいに描写されていて、ためきの兵吉との交流も温かに書かれています。信じていた人に騙され、懐いてくれた兵吉を疑ってしまったがために、悲劇的なラストとなってしまいます。読んだ後に胸に残るのが物悲しさしかなかったたので、物語りとしての救いがどこかにほしかったです。

牛崎

敏哉

炭団で生計を立てる、山奥の炭焼き人・十兵衛の物語。燃える炭団の温もりに、生きている幸せを実感する姿にはほのぼのとさせられる。しかし炭団が盗まれていることに気が付き、唯一の友であるためきの兵吉への疑惑と、庄屋の裏切りが判明するまでの急展開の描写は巧い。作者は最悪の結末を十兵衛に用意しているが、その他の展開はなかったのだろうか。

夏井

敬雄

「何のために炭団を持ち帰ったんだよ。」と、十兵衛が兵吉に尋ねていたら、この悲劇は起こらなかったのだろうか。この物語は相手の真意を理解することの難しさを教えてくれる。燃える炭団のそばで、兵吉を膝に乗せて過ごす幸福な十兵衛には、兵吉の切ないほどの幸福感がわかってはいない。夢のような時間を創り出す炭団に身を寄せて寒い夜を過ごす兵吉のことがわかっていなかったのだ。一言も話さない動物との愛憎の物語がとても新鮮に感じられた。

やえがしなおこ

民話風の温かさを感じる作品。堅気で心優しい炭焼きの十兵衛と、ためきの兵吉の交流が丁寧に描かれている。善人かと思えた庄屋さんが、実は悪人だったという展開も意外でおもしろい。ためきが、型通りの恩返しではなく、自分のために炭を盗んでいたという設定は、結局悲劇に終わって切なかった。

受賞作品

銅賞 作品一覽

☆ 「薰子と人魚」

大塚 菜々子 茨城県 聖徳大学附属取手聖徳女子高等学校2年

☆ 「星を詠うくじら」

今井 和奏 長野県 松商学園高等学校3年

☆ 「お山のいる街」

中谷 結衣子 京都府 京都女子高等学校3年

☆ 「狐七郎と紫の絵馬」

佐藤 穂佳 大阪府 府立布施高等学校2年

☆ 「気ノキオ」

松尾 菜那香 兵庫県 甲英学院別科駿台甲府高等学校3年

☆ 「おくるもの」

大中 怜奈 山口県 誠英高等学校3年

☆ 「トンカラリン」

右橋 糸 福岡県 県立筑紫丘高等学校2年

【学校賞】

該当なし

【奨励賞】

埼玉県 県立和光国際高等学校

京都府 同志社女子高等学校

大阪府 府立布施高等学校

ノミネート記念作品一覧

- ☆「あの空を、駆けて、飛んで、」
菅原 幸倫 北海道 旭川東高等学校2年
- ☆「黒いはね」
森 蒼龍 北海道 札幌月寒高等学校2年
- ☆「森の少年」
木村 舞衣 埼玉県 県立大宮高等学校1年
- ☆「[走れ]君の足元より」
金 鉢 昨 埼玉県 県立和光国際高等学校1年
- ☆「然自家」
堀 口 明 希 埼玉県 県立和光国際高等学校1年
- ☆「白鷺の息子」
渡 邊 莉 子 埼玉県 県立和光国際高等学校1年
- ☆「あなたの花が咲く頃に」
西 川 ま い 東京都 白百合学園高等学校2年
- ☆「お菓子売りといたずら猫」
倍 賞 瑠 月 神奈川県 県立百合丘高等学校2年
- ☆「夜のおくりびと」
横 井 真 那 愛知県 県立愛知商業高等学校3年
- ☆「ネコとニンゲン」
石 川 春 果 愛知県 県立時習館高等学校2年
- ☆「わたしとあの子とソーダ色の空」
林 陽 菜 愛知県 藤ノ花女子高等学校3年
- ☆「さよなら私の人魚姫」
金 倉 未 佳 京都府 京都西山高等学校3年
- ☆「夏の白猫」
別 府 杏 佳 京都府 同志社女子高等学校3年
- ☆「ユキと森の魔法使い」
森 山 ら ら 京都府 同志社女子高等学校3年
- ☆「水の羽根」
山 本 彩 葵 京都府 同志社女子高等学校3年
- ☆「行ってきます」
西 上 桃 優 大阪府 府立布施高等学校2年
- ☆「みみちゃんのクレヨン」
持 田 美 海 広島県 県立加計高等学校2年
- ☆「古竜の宝物」
河 野 仁 美 広島県 県立呉三津田高等学校1年
- ☆「母さん、頑張れ」
水 津 彩 矢 乃 山口県 慶進高等学校3年

第1回 受賞作品

- ☆金の星賞 「干^{ひがな}潟の夜に」
方 丈 真菜美 千葉県 県立千葉高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「ミドリノコエ」
池 宮 奈々子 沖縄県 県立那覇西高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「ちびときつねとおばあちゃんと」
昆 ちひろ 岩手県 県立不来方高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「水^{すいお}音の虹」
山 崎 美 穂 東京都 豊岡女子学園高等学校 1年
- ☆銅 賞 「お日さまと白い花」
阿 部 暁 子 岩手県 県立花巻北高等学校 1年
- ☆銅 賞 「お茶とオニギリ」
佐 藤 香 織 群馬県 県立高崎商業高等学校 2年
- ☆銅 賞 「音の子ララ」
波 場 友美子 神奈川県 鎌倉女学院高等学校 1年
- ☆銅 賞 「その心、忘れないでください」
生 瀬 千紗子 神奈川県 鎌倉女学院高等学校 1年
- ☆銅 賞 「夜」
伊 藤 香 奈 岐阜県 県立各務原西高等学校 3年
- ☆銅 賞 「お星様をさがしに」
加 藤 直 樹 愛知県 南山高等学校 3年
- ☆銅 賞 「伝 統」
五百森 裕 子 香川県 県立飯山高等学校 3年
- ☆銅 賞 「お空にのぼったクモ」
坂 中 彩 長崎県 向陽高等学校 3年

第2回 受賞作品

- ☆金の星賞 「夢の羽～僕たちの約束～」
藤 原 歆 子 岡山県 県立津山高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「夏色の奇跡」
岡 部 綾 子 東京都 都立戸山高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「真夜中の冒険」
平 沢 美 佳 茨城県 県立水戸第三高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「ノラ爺のきらきらぼし」
橘 加奈子 岩手県 県立盛岡第二高等学校 3年
- ☆銅 賞 「からっぽの郵便箱」
吉 田 千 明 北海道 旭川藤女子高等学校 3年
- ☆銅 賞 「ねずみの勇氣」
小 野 雅 子 山形県 県立新庄南高等学校 3年
- ☆銅 賞 「月の下の晚餐会」
菊 池 優 香 千葉県 県立松戸高等学校 3年
- ☆銅 賞 「座敷わらし」
志 村 美 保 東京都 京華商業高等学校 3年
- ☆銅 賞 「陽のあたる丘」
金 行 めぐみ 東京都 白百合学園高等学校 2年
- ☆銅 賞 「コスモスのうた」
森 田 佳代子 富山県 県立井波高等学校 3年
- ☆銅 賞 「ナツの思い出」
伊 賀 みなみ 兵庫県 小林聖心女子高等学校 2年
- ☆銅 賞 「旅人」
池 村 怜 也 沖縄県 県立宮古農林高等学校 3年

第3回 受賞作品

- ☆金の星賞 「Comfortable Doll」
山本晴佳 栃木県 作新学院高等学校 1年
- ☆銀の星賞 「ないしょないしょの星祭り」
島貫春菜 山形県 県立山形西高等学校 1年
- ☆銀の星賞 「ジイチャンは僕のヒーローで」
小林奈々絵 北海道 根室高等学校 1年
- ☆銀の星賞 「月の夜」
菅野澄子 東京都 恵泉女子学園高等学校 3年
- ☆銅賞 「おみつ」
富樫雅章 山形県 県立置賜農業高等学校 3年
- ☆銅賞 「おばけ屋敷で見たものは」
木本奈緒 茨城県 県立土浦第二高等学校 1年
- ☆銅賞 「風の唄」
小川萌 東京都 お茶の水女子大学附属高等学校 1年
- ☆銅賞 「夏の約束」
服部真季 東京都 お茶の水女子大学附属高等学校 2年
- ☆銅賞 「てのひらのそら」
神崎由依子 東京都 慶応義塾女子高等学校 2年
- ☆銅賞 「夜空に浮かぶデュランタ」
峠田彩香 愛知県 県立時習館高等学校 1年
- ☆銅賞 「たからもの」
小林千津 京都府 同志社女子高等学校 3年
- ☆銅賞 「存在のあり方」
高畑明弘 香川県 尽誠学園高等学校 2年

第4回 受賞作品

- ☆金の星賞 「カラーメーター」
岡安茉莉花 埼玉県 栄東高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「ネコシャンブーのぼうけん」
矢吹優衣 福島県 県立光南高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「life times」
山本晴佳 栃木県 作新学院高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「RESET」
土屋絵美 東京都 白百合学園高等学校 1年
- ☆銅賞 「空色スケッチ」
石川朋 岩手県 県立水沢高等学校 2年
- ☆銅賞 「サマー・セブン・デイズ」
岡野真理 茨城県 県立竜ヶ崎第一高等学校 2年
- ☆銅賞 「青いカバ」
菅和也 東京都 早稲田大学高等学院 3年
- ☆銅賞 「フィードルの旅」
谷田雄一 東京都 早稲田大学高等学院 3年
- ☆銅賞 「しわとりばあさん」
森脇梓 京都府 府立北桑田高等学校 1年
- ☆銅賞 「二人の世界～空に流れる歌～」
中山真依 兵庫県 神戸海星女子学院高等学校 2年
- ☆銅賞 「Wish」
瀬良垣香 沖縄県 県立具志川高等学校 2年

第5回 受賞作品

- ☆金の星賞 「かっぱのはなし」
矢 吹 優 衣 福島県 県立光南高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「お化け踏切と不思議な窓」
三 宮 海 里 北海道 立命館慶祥高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「惑星観覧車」
大 野 真 季 栃木県 県立氏家高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「家族になろう」
山 本 晴 佳 栃木県 作新学院高等学校 3年
- ☆銅 賞 「夏休み ヒカリのオト」
工 藤 千 明 岩手県 県立盛岡商業高等学校 2年
- ☆銅 賞 「歌、満ちる夜」
島 貴 春 菜 山形県 県立山形西高等学校 3年
- ☆銅 賞 「ビー玉にうつるココロ」
岡 野 真 理 茨城県 県立竜ヶ崎第一高等学校 3年
- ☆銅 賞 「透明人間」
畑 野 舞 子 東京都 お茶の水女子大学附属高等学校 2年
- ☆銅 賞 「ミリのそばにいるよ」
森 仁 美 徳島県 県立城南高等学校 3年
- ☆銅 賞 「双子の肖像」
筒 井 陽 香 山口県 梅光女学院高等学校 3年
- ☆銅 賞 「Hg～水銀の魅力～」
荒 瀬 菜穂子 福岡県 県立小倉商業高等学校 2年
- ☆銅 賞 「約束の旅」
松 本 貴 子 沖縄県 県立嘉手納高等学校 3年

第6回 受賞作品

- ☆銀の星賞 「かっぱのかあちゃん」
市 川 愛 東京都 白百合学園高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「思い出の思い出は風の庭」
黒 田 佳 奈 香川県 県立三木高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「憎しみのカラス」
横 田 仁 美 山口県 県立防府高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「夕焼けの精」
河 原 奈 里 熊本県 県立熊本高等学校 2年
- ☆銅 賞 「^{しんわ}森話」
阿 部 美智子 岩手県 県立盛岡第二高等学校 1年
- ☆銅 賞 「おじいさんの棺」
伊 藤 早 紀 埼玉県 県立大宮武蔵野高等学校 2年
- ☆銅 賞 「虹色の枠の窓」
柴 原 由 季 千葉県 県立柏南高等学校 1年
- ☆銅 賞 「僕が強くなる日は、」
井 上 澄 香 東京都 都立富士高等学校 1年
- ☆銅 賞 「黒板ピリー」
河 合 礼 子 神奈川県 市立横浜商業高等学校 2年
- ☆銅 賞 「風送る」
若 槻 理 恵 島根県 県立横田高等学校 3年
- ☆銅 賞 「悲しいアクマ」
古 賀 ちひろ 福岡県 中村学園女子高等学校 3年

第7回 受賞作品

- ☆金の星賞 「鏡に映る夢」
武田 啓太 山形県 県立新庄南高等学校2年
- ☆銀の星賞 「ミコの大切な大切なものは」
石澤 咲希 岩手県 県立福岡高等学校3年
- ☆銀の星賞 「僕と狐」
北山 萌夏 東京都 文化女子大学附属杉並高等学校1年
- ☆銀の星賞 「くすの木のうた」
柳原 茉美佳 大阪府 大阪教育大学附属高等学校2年
- ☆銅賞 「空の旋律」
中島 菜月 群馬県 東京農業大学第二高等学校2年
- ☆銅賞 「子守桜」
清水 真裕 埼玉県 県立伊奈学園総合高等学校3年
- ☆銅賞 「星の降る夜」
山口 祥子 石川県 県立大聖寺高等学校2年
- ☆銅賞 「文字の旅」
田村 菜 愛知県 滝高等学校2年
- ☆銅賞 「毎週月・金は星の日です」
高山 愛美 岐阜県 県立加茂高等学校3年
- ☆銅賞 「いらぬ記憶の回収屋」
小屋 果歩 兵庫県 小林聖心女子学院高等学校1年
- ☆銅賞 「Love in Snow」
根 宜 めぐみ 島根県 県立太田高等学校2年

第8回 受賞作品

- ☆金の星賞 「昨日オバケ」
石田 祐也 群馬県 県立桐生高等学校2年
- ☆銀の星賞 「あめふるとき」
葛生 明日香 千葉県 東京学館高等学校1年
- ☆銀の星賞 「当たり前のこと」
石川 茉耶 東京都 お茶の水女子大学附属高等学校1年
- ☆銀の星賞 「上弦の海」
上岡 沙都 神奈川県 日本女子大学附属高等学校3年
- ☆銅賞 「桜の舞う頃に」
小林 明日香 埼玉県 秋草学園高等学校3年
- ☆銅賞 「空を見上げて」
川上 小百合 千葉県 千葉国際高等学校1年
- ☆銅賞 「いちにち いちにち…」
吉岡 佑里恵 東京都 お茶の水女子大学附属高等学校2年
- ☆銅賞 「名のない喫茶店」
吉井 加奈 神奈川県 カリタス女子高等学校1年
- ☆銅賞 「贈り物」
長谷川 礼奈 神奈川県 日本女子大学附属高等学校1年
- ☆銅賞 「天体観測～星になった少年～」
豊原 彩香 福岡県 県立筑紫丘高等学校2年
- ☆銅賞 「ノノ」
吉井 史歩 鹿児島県 県立鶴丸高等学校3年

第9回 受賞作品

- ☆金の星賞 「うそつきねこムクリ」
吉澤 仁衣那 群馬県 県立高崎東高等学校3年
- ☆銀の星賞 「うそつきと魂管理人」
藤本 美紗子 東京都 お茶の水女子大学附属高等学校2年
- ☆銀の星賞 「トンボ池」
田口 健司 東京都 創価高等学校3年
- ☆銀の星賞 「SHEEP SLEEP」
長谷川 礼奈 神奈川県 日本女子大学附属高等学校2年
- ☆銅賞 「きいろの国」
工藤 舞子 青森県 県立弘前中央高等学校3年
- ☆銅賞 「夏跡」
増田 恵美 埼玉県 県立浦和第一女子高等学校1年
- ☆銅賞 「赤鬼と正月」
北田 ゆず 東京都 白百合学園高等学校2年
- ☆銅賞 「コトバの国」
茂木 まどか 山梨県 北杜市立甲陵高等学校1年
- ☆銅賞 「博士の愛したロボット」
八箇 裕子 富山県 県立大門高等学校1年
- ☆銅賞 「怪獣事件簿がくれたもの」
遠山 奈津子 岐阜県 県立恵那農業高等学校3年
- ☆銅賞 「仔猫の唄」
水船 愛英理 京都府 京都女子高等学校2年

第10回 受賞作品

- ☆金の星賞 「机の中は空」
内田 彩香 埼玉県 本庄第一高等学校2年
- ☆銀の星賞 「霧川の童」
高田 有優美 山形県 県立山形西高等学校2年
- ☆銀の星賞 「シルベル」
古関 友梨香 神奈川県 日本女子大学附属高等学校3年
- ☆銀の星賞 「アルクの大冒険」
坪井 みづき 京都府 府立京都すばる高等学校3年
- ☆銅賞 「クウの手紙交換」
川上 雅子 宮城県 秀光中等教育学校1年
- ☆銅賞 「またたき」
水野 秀成子 東京都 桐朋女子高等学校1年
- ☆銅賞 「ぼくたちのなつやすみ」
品田 茉莉絵 神奈川県 日本女子大学附属高等学校3年
- ☆銅賞 「空色は恋」
西山 萌 神奈川県 日本女子大学附属高等学校3年
- ☆銅賞 「もう一人の俺」
溝口 達康 京都府 府立京都すばる高等学校3年
- ☆銅賞 「夢の中の大図書館」
金川 絵梨花 兵庫県 武庫川女子大学附属高等学校3年
- ☆銅賞 「ビー玉水溶液」
佐々木 和 福岡県 県立筑紫丘高等学校2年

第11回 受賞作品

- ☆金の星賞 「うちゅう人からのてがみ」
番 場 絵 里 茨城県 茨城高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「どうして」
川 上 雅 子 宮城県 秀光中等教育学校 2年
- ☆銀の星賞 「おばあちゃんのドライバー」
上 田 侑 乃 埼玉県 浦和第一女子高等学校 1年
- ☆銀の星賞 「陽炎少年」
水 田 佳 奈 京都府 同志社女子高等学校 3年
- ☆銅 賞 「涙の栓」
長谷川 愛 瑠 青森県 県立五所川原高等学校 1年
- ☆銅 賞 「恋色ラムネ」
中 野 沙 紀 岩手県 県立花北青雲高等学校 2年
- ☆銅 賞 「露玉花語」
高 田 有優美 山形県 県立山形西高等学校 3年
- ☆銅 賞 「見沼のやくそく」
松 藤 美瑳子 埼玉県 県立浦和第一女子高等学校 2年
- ☆銅 賞 「ひとりぼっちの王様」
石 坂 梓 東京都 東京女子学園高等学校 1年
- ☆銅 賞 「心の中の星空へ」
北 澤 友里恵 東京都 お茶の水女子大学附属高等学校 1年
- ☆銅 賞 「先生」
島 田 瑛 京都府 同志社女子高等学校 3年

第12回 受賞作品

- ☆金の星賞 「金色のカメ」
上 田 侑 乃 埼玉県 県立浦和第一女子高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「にこにこ」
長谷川 愛 瑠 青森県 県立五所川原高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「はじめの一步」
関 菜々美 東京都 白百合学園高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「かけこえは「泣き虫ヒーロー！」」
吉 岡 明日香 神奈川県 横浜共立学園高等学校 2年
- ☆銅 賞 「夏の終わり」
清水畑 央 岩手県 県立平舘高等学校 3年
- ☆銅 賞 「お姉ちゃんになった日」
小田島 夕 花 岩手県 県立花巻北高等学校 1年
- ☆銅 賞 「お兄ちゃんに会いに」
似 内 萌 花 岩手県 県立花巻北高等学校 1年
- ☆銅 賞 「サンノ森」
川 上 雅 子 宮城県 秀光中等教育学校 3年
- ☆銅 賞 「カップの川流れ」
村 上 佳代子 宮城県 常盤木学園高等学校 2年
- ☆銅 賞 「人形語り」
坂 井 遥 香 福岡県 県立筑紫丘高等学校 2年
- ☆銅 賞 「月の花通りのかばん屋さん」
濱 田 鈴 鹿児島県 県立大島高等学校 1年

第13回 受賞作品

- ☆金の星賞 「シンフォニー」
原尾 勇 貴 神奈川県 公文国際学園高等部 1年
- ☆銀の星賞 「鬼の子トキ」
上田 侑 乃 埼玉県 県立浦和第一女子高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「アイーシャと奇跡の種」
大場 あすみ 千葉県 麗澤高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「春の野のアレックス」
千石 芙紀子 神奈川県 横浜雙葉高等学校 2年
- ☆銅 賞 「星にねがいを」
小田島 夕 花 岩手県 県立花巻北高等学校 2年
- ☆銅 賞 「茜色の空」
小長井 素 賢 埼玉県 県立浦和第一女子高等学校 1年
- ☆銅 賞 「優しさのカタチ」
関 菜々美 東京都 白百合学園高等学校 3年
- ☆銅 賞 「寛太日記」
藪 田 薫 理 東京都 白百合学園高等学校 2年
- ☆銅 賞 「特急蜻蛉——機三郎の手記より」
三橋 克 馬 神奈川県 県立津久井浜高等学校 3年
- ☆銅 賞 「そして僕等は動きだす」
蓼 沼 理 紗 神奈川県 日本女子大学附属高等学校 3年
- ☆銅 賞 「夏の桜」
田 畑 奈 緒 鹿児島県 鹿児島純心女子高等学校 1年

第14回 受賞作品

- ☆金の星賞 「うまれる」
小田島 夕 花 岩手県 県立花巻北高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「蝉と花火」
山 寺 杏 奈 千葉県 西武台千葉高等学校 1年
- ☆銀の星賞 「金色の思い出一座敷わらしに会った秋ー」
吉 武 英 莉 東京都 白百合学園高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「僕を変えた夏休み」
歌 津 ま い 京都府 府立北嵯峨高等学校 3年
- ☆銅 賞 「木の山田さん」
柴 田 宏 大 北海道 小樽潮陵高等学校 3年
- ☆銅 賞 「深森奇譚」
松 村 美 里 東京都 鷗友学園女子高等学校 1年
- ☆銅 賞 「逃げないで、心」
戸 塚 紀 名 東京都 白百合学園高等学校 1年
- ☆銅 賞 「五年D組 深海クラス」
原尾 勇 貴 神奈川県 公文国際学園高等部 1年
- ☆銅 賞 「鈴の音と天狗の山」
千石 芙紀子 神奈川県 横浜雙葉高等学校 3年
- ☆銅 賞 「夏の終わり」
瓜 田 実 可 静岡県 県立清水南高等学校 1年
- ☆銅 賞 「ねずみのお化粧屋」
堀 井 柚 月 愛知県 県立西尾高等学校 1年

第15回 受賞作品

- ☆金の星賞 「めづ様」
佐藤 礼 菜 岩手県 県立水沢高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「アイアン」
原 尾 勇 貴 神奈川県 公文国際学園高等部 3年
- ☆銀の星賞 「[いし]のライオン」
迫 田 知 樹 大阪府 府立岸和田高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「冬馬とカンタ」
田 中 春 日 兵庫県 県立洲本高等学校 3年
- ☆銅 賞 「恥ずかしがり屋の特効薬」
齋 藤 秀 仁 群馬県 県立高崎東高等学校 2年
- ☆銅 賞 「三人の子供」
徳 永 志 帆 東京都 大妻多摩高等学校 2年
- ☆銅 賞 「古本屋」
福 嶋 一 菜 神奈川県 県立鎌倉高等学校 1年
- ☆銅 賞 「お日様フルーツ」
岩 佐 菜 々 子 福井県 県立藤島高等学校 1年
- ☆銅 賞 「アルフレッドと鏡」
宮 澤 かれん 静岡県 県立御殿場南高等学校 2年
- ☆銅 賞 「信じる強さ」
森 内 千 裕 大阪府 府立農芸高等学校 1年
- ☆銅 賞 「キツネが鳴く時」
田 畑 奈 緒 鹿児島県 鹿児島純心女子高等学校 3年

第16回 受賞作品

- ☆金の星賞 「弱虫鬼ごっこ」
佐藤 綾 香 岩手県 県立水沢高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「影隠し」
佐藤 礼 菜 岩手県 県立水沢高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「ひとりで電車に乗った日」
内 田 夏 鈴 東京都 立教女学院高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「本の虫」
小 山 夏 子 神奈川県 カリタス女子中学高等学校 1年
- ☆銅 賞 「雪とうそつき」
小 河 碧 峰 群馬県 県立前橋女子高等学校 1年
- ☆銅 賞 「たまきのたましい」
菊 地 結 衣 埼玉県 県立浦和第一女子高等学校 1年
- ☆銅 賞 「かしの木の山」
木 村 かのん 東京都 聖心女子学院高等科 3年
- ☆銅 賞 「形或るもの」
羽 鳥 友 稀 静岡県 県立沼津東高等学校 2年
- ☆銅 賞 「とべない僕ら」
朱 宮 奈々葉 愛知県 県立一宮南高等学校 1年
- ☆銅 賞 「水色の秘密基地」
中 村 燎 平 福岡県 県立筑紫丘高等学校 2年
- ☆銅 賞 「あぶらあげ」
泉 侑 紀 熊本県 有明高等学校 2年

第17回 受賞作品

- ☆金の星賞 「知恵の神さま」
高橋 璃 来 北海道 標茶高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「二人のおじいちゃん」
肥 沼 由里子 埼玉県 浦和第一女子高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「猿の子」
加 藤 言 美 東京都 香蘭女学校高等科 1年
- ☆銀の星賞 「あたりめと金平糖」
小 山 夏 子 神奈川県 カリタス女子高等学校 2年
- ☆銅 賞 「線香花火が消えるまで」
友 清 佳 南 東京都 瀧野川女子学園高等学校 2年
- ☆銅 賞 「僕はアイスクリーム王子」
姫 野 友梨香 山梨県 駿台甲府高等学校 2年
- ☆銅 賞 「追憶」
長 倉 佑 夏 静岡県 県立吉原高等学校 2年
- ☆銅 賞 「コノハの不思議な夏」
朱 宮 奈々葉 愛知県 県立一宮南高等学校 2年
- ☆銅 賞 「少女と虹の橋」
佃 遥 佳 京都府 府立北嵯峨高等学校 3年
- ☆銅 賞 「8月のトレジャーハンター」
上 杉 ほのか 福岡県 県立筑紫丘高等学校 1年
- ☆銅 賞 「子狐の筆」
東 福 洋 美 福岡県 中村学園女子高等学校 3年
- 【学校賞】 同志社女子高等学校（京都府）
【奨励賞】 藤ノ花女子高等学校（愛知県）、翔凜高等学校（千葉県）

第18回 受賞作品

- ☆金の星賞 「セミのめげがら」
山 木 晴 香 大阪府 大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎 1年
- ☆銀の星賞 「狐とおばあさん」
西 部 響 京都府 府立北嵯峨高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「竜の子」
藤 川 諒 子 徳島県 県立富岡東高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「月とトマト」
瀬 口 愛 奈 福岡県 県立修猷館高等学校 3年
- ☆銅の星賞 「くじら座の物語」
千 葉 滯 奈 岩手県 県立一関第一高等学校 3年
- ☆銅の星賞 「ゆうたの夏祭り」
尾 下 陽 菜 東京都 女子学院高等学校 2年
- ☆銅の星賞 「ミレニウムドラゴンベイビー」
小 山 夏 子 神奈川県 カリタス女子高等学校 3年
- ☆銅の星賞 「翡翠」
餘 吾 美夏生 神奈川県 県立茅ヶ崎北陵高等学校 2年
- ☆銅の星賞 「どんなに小さくても」
長 倉 佑 夏 静岡県 県立吉原高等学校 3年
- ☆銅の星賞 「月の手記」
山 本 彩 乃 広島県 広島市立舟入高等学校 1年
- ☆銅の星賞 「おじいちゃんとお魚様」
寺 地 菜々海 鹿児島県 県立川内高等学校 3年
- 【学校賞】 日本女子大学附属高等学校（神奈川県）
【奨励賞】 兵庫県立姫路工業高等学校（兵庫県）

第19回 受賞作品

- ☆金賞 「普通じゃない」
藤川 諒子 徳島県 県立富岡東高等学校3年
- ☆銀賞 「二〇〇円のおぼけ」
廣見 結菜 広島県 福山暁女子高等学校2年
- ☆銀賞 「悲哀のひまわり」
岡本 沙慧可 山口県 梅光学院高等学校3年
- ☆銀賞 「自販機」
大城 涼佳 沖縄県 県立小禄高等学校2年
- ☆銅賞 「土澤駅」
梅村 琴音 岩手県 県立一関第一高等学校1年
- ☆銅賞 「国と大蛇とこどもたちの話」
中林 綾音 群馬県 東京農業大学第二高等学校1年
- ☆銅賞 「ゆうなぎのつた」
伊藤 珠花 埼玉県 県立上尾高等学校3年
- ☆銅賞 「ちいさな森の物語」
仙波 智晴 富山県 県立高岡高等学校2年
- ☆銅賞 「宝石のひとみ」
山本 晴香 大阪府 大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎2年
- ☆銅賞 「熊狐物語」
岩木 彼方 岡山県 県立岡山一宮高等学校3年
- ☆銅賞 「鈴ラムネ」
片山 恵 熊本県 県立玉名高等学校1年
- 【奨励賞】 神戸星城高等学校 (兵庫県)

第20回 受賞作品

- ☆金賞 「縞猫」
賀来 心音 埼玉県 浦和明の星女子高等学校1年
- ☆銀賞 「鯨のオーエン」
七海 千夏 福島県 尚志高等学校2年
- ☆銀賞 「土産」
青野 有佳 石川県 金沢大学附属高等学校1年
- ☆銀賞 「窓ぎわの友達」
柿沼 希実 京都府 同志社女子高等学校3年
- ☆銅賞 「さなぎびと」
富樫 煌 北海道 北海道旭川東高等学校2年
- ☆銅賞 「時計台」
牧野 優芽 北海道 北海道札幌国際情報高等学校2年
- ☆銅賞 「名もなき羊飼いの話」
白井 拓斗 千葉県 県立柏高等学校3年
- ☆銅賞 「物売りは値段を付けない」
土屋 喜楽 神奈川県 県立金沢総合高等学校3年
- ☆銅賞 「空からのデリバリー屋さん」
落合 紗也華 京都府 同志社女子高等学校3年
- ☆銅賞 「仮面屋」
松末 まどか 愛媛県 県立松山西中等教育学校1年
- ☆銅賞 「トンボのおっさん一人旅」
岩松 香弥 福岡県 県立筑紫丘高等学校1年
- ☆銅賞 「空の海の散歩」
宮田 千晴 鹿児島県 れいめい高等学校1年
- 【学校賞】 同志社女子高等学校 (京都府)
- 【奨励賞】 北海道札幌国際情報高等学校 (北海道)

第21回 受賞作品

☆銀賞

「歳月を紡ぐ鳥」

熊倉友音 東京都 かえつ有明高等学校2年

☆銀賞

「ニセモノ」

深澤未知佳 神奈川県 日本女子大学附属高等学校3年

☆銀賞

「おはなしや」

樋田優 長野県 佐久長聖高等学校2年

☆銀賞

「花の夢」

空井慧 愛知県 県立時習館高等学校2年

☆銅賞

「ひとりぼっちの役者」

緒方翠 東京都 駒沢学園女子高等学校3年

☆銅賞

「ことばの矢」

船津薫子 東京都 創価高等学校2年

☆銅賞

「生ゴミの大脱走」

千葉玲美 東京都 中央大学附属高等学校2年

☆銅賞

「桜色のワンピース」

降矢梨々花 神奈川県 日本女子大学附属高等学校3年

☆銅賞

「飛べないハヤブサ」

伊東咲春 愛知県 県立時習館高等学校2年

☆銅賞

「私の音楽の先生」

佐藤杏耶 愛知県 藤ノ花女子高等学校3年

☆銅賞

「夢見たあの世界」

国村ひなた 熊本県 県立玉名工業高等学校2年

☆銅賞

「カラスのいえ」

福島嘉津穂 鹿児島県 県立川内高等学校2年

【学校賞】 日本女子大学附属高等学校（神奈川）

【奨励賞】 時習館高等学校（愛知）

第21回 ノミネート記念作品

- ☆「また、白銀の頃に」
多田 帆 香 岩手県 県立花巻南高等学校 1年
- ☆「サーカスがくれた勇気」
安住 ひかる 宮城県 宮城学院高等学校 2年
- ☆「決意を力に」
阿久津 瑞 希 栃木県 TBC高等専修学校 3年
- ☆「アマガエルとヒキガエル」
曾 篠 珠 伶 埼玉県 県立浦和第一女子高等学校 2年
- ☆「大樹のミルク」
石 丸 結 菜 千葉県 県立清水高等学校 2年
- ☆「ないものねだりのクラゲたち」
加 藤 清 葉 東京都 江戸川女子高等学校 2年
- ☆「夢売りのほうき星」
川 崎 日 瑚 東京都 東京家政大学附属女子高等学校 3年
- ☆「バターに溶けるビターな思い出」
吉 川 文 菜 神奈川県 日本女子大学附属高等学校 3年
- ☆「モノクロの不思議な冒険」
杉 野 碧 神奈川県 日本女子大学附属高等学校 3年
- ☆「少年と老人」
青 野 有 佳 石川県 金沢大学附属高等学校 2年
- ☆「放課後の掃除」
川 上 耀 誉 愛知県 藤ノ花女子高等学校 2年
- ☆「止まない雨」
大 石 結 香 愛知県 藤ノ花女子高等学校 3年
- ☆「僕と魔法のスケッチブック」
山 田 果 歩 京都府 同志社女子高等学校 3年
- ☆「ぼくの手」
松 本 麻 由 京都府 同志社女子高等学校 3年
- ☆「四本腕のブライト」
山 村 莉 世 京都府 同志社女子高等学校 3年
- ☆「テオの夢」
山 口 彩 葉 兵庫県 県立加古川東高等学校 2年
- ☆「死神とエラ」
湊 むつみ 奈良県 県立郡山高等学校 2年
- ☆「壊れた時計のその先は」
吉 本 有 那 広島県 県立安西高等学校 3年
- ☆「君だけの人生」
橋 本 京 華 山口県 県立防府商工高等学校 2年
- ☆「森で一番星がきれいな場所」
神 田 怜 長崎県 県立長崎西高等学校 2年
- ☆「ちりん～風鈴の約束～」
野 邊 咲也子 宮崎県 宮崎第一高等学校 1年

第22回 受賞作品

☆金賞

「渡り鳥のルチア」

湊 むつみ 奈良県 県立郡山高等学校3年

☆銀賞

「青い氷の結晶」

十川 理世 千葉県 市川高等学校1年

☆銀賞

「キャンパスの中の貴方」

榑間 茜里 東京都 工学院大学附属高等学校2年

☆銀賞

「雨夜の星」

谷 まゆみ 高知県 県立山田高等学校1年

☆銅賞

「月よみ観測所」

菊地 奏 東京都 お茶の水女子大学附属高等学校3年

☆銅賞

「世界でいちばんかっこいいライオン」

種畑 帆希 東京都 女子学院高等学校1年

☆銅賞

「あなたへ」

青野 有佳 石川県 金沢大学附属高等学校3年

☆銅賞

「くろいろひつじと涙の川」

河合 ひなた 岐阜県 県立武義高等学校2年

☆銅賞

「海に溶ける」

小野 真央 京都府 花園高等学校3年

☆銅賞

「神様との夏祭り」

舌間 心晴 福岡県 県立筑紫丘高等学校2年

☆銅賞

「色々なものに変身」

岡村 勇翔 熊本県 必由館高等学校2年

第22回 ノミネート記念作品

- ☆「ざしきわたし」
柳 田 幸 乃 岩手県 県立盛岡第一高等学校3年
- ☆「砂手」
海 野 日 暖 埼玉県 県立大宮高等学校1年
- ☆「あおと虎と猫」
高 野 和 埼玉県 県立坂戸高等学校1年
- ☆「浮世は夢に見えて」
樫 本 莓 佳 千葉県 市川高等学校1年
- ☆「すきなことできるや」
根 本 紗 華 東京都 白百合学園高等学校2年
- ☆「めざして」
廣 岡 香 東京都 創価高等学校1年
- ☆「宝探し」
井 出 彩 乃 長野県 長野県小海高等学校3年
- ☆「ニホンアシ」
大 洞 美 結 岐阜県 県立岐阜高等学校3年
- ☆「二国物語」
源 嶋 葵 衣 岐阜県 帝京大学可児高等学校1年
- ☆「月が喰われた日」
藤 井 彩 愛知県 県立愛知商業高等学校2年
- ☆「勿忘草が枯れるまで」
川 上 耀 誉 愛知県 藤ノ花女子高等学校3年
- ☆「隠し味に愛情を込めて」
齊 藤 朱 里 京都府 同志社女子高等学校3年
- ☆「Two Stories」
中 田 琴 音 京都府 同志社女子高等学校3年
- ☆「翡翠になったカワセミ」
樋 垣 志 穂 京都府 同志社女子高等学校3年
- ☆「ドンドン打ってけ！」
宮 本 遥 加 京都府 同志社女子高等学校3年
- ☆「届くよきっと」
生 田 菜々美 兵庫県 県立加古川東高等学校2年
- ☆「私の勝ち」
山 口 和華那 兵庫県 神戸星城高等学校1年
- ☆「白いユリの少女」
片 岡 恵 広島県 舟入高等学校2年
- ☆「棗のそばの日向氷」
南 朱 莉 福岡県 県立筑紫丘高等学校1年
- ☆「ふうりん ちりん」
東 山 成 実 熊本県 必由館高等学校2年
- ☆「月が満ちるまで」
島 袋 光 平 沖縄県 県立コザ高等学校2年

選考委員

(五十音順)



いしの
石野

あきこ
晶 (小説家)

岩手県出身。二〇〇七年に『パークチルドレン』で第八回小学館文庫小説賞を受賞し小説家デビュー。二〇一〇年には『月のさなぎ』で、第二十二回日本ファンタジーノベル大賞優秀賞を受賞。



うしき
牛崎

としや
敏哉 (宮沢賢治記念館学芸員)

岩手県花巻市出身。学芸員。国民文化祭児童演劇脚本本賞等受賞。共著に『宮沢賢治の深層』他多数。小説「銀河鉄道の父」(門井慶喜・作) 方言監修等。また「劇団らあす」にて演劇活動を展開。



夏井^{なつじ}敬雄^{たかお}
(富士大学教授)

岩手県久慈市出身。岩手県立総合教育センター教科領域教育室長、岩手県高等学校文化連盟文芸専門部長、岩手県立岩泉高等学校長、岩手県立大船渡高等学校校長を歴任。「日本語の世界」等の講義を担当。



やえがしなおこ
(童話作家)

同人誌「びわの美ノート」(松谷みよ子責任編集) 童話教室に学ぶ。『雪の林』で第十五回椋鳩十児童文学賞、第二十二回新美南吉児童文学賞を受賞。物語、絵本、紙芝居作品など。岩手県在住。

第一回からの受賞作品（金賞・銀賞）は、童話大賞
公式ウェブサイトに掲載しています。

<http://www.fuji-u.ac.jp/koukousei-douwa>



全国高校生童話大賞受賞作品集

発行日／2024年12月7日

発行／**全国高校生童話大賞実行委員会**
富士大学
花巻市
花巻市教育委員会

事務局／〒025-8501 花巻市下根子450-3 富士大学内
全国高校生童話大賞実行委員会事務局

◆本作品集に掲載の文章・イラスト等の無断転載を禁じます。